

から後へと變遷する、人情風俗、衣服調度、目に觸る、ものを其儘、又は故實を究めて描残して置いたら、どれだけ後の世の爲かも知れぬ、繪そらごことが何になる」と云つて、筆を執れば必ず寫實を旨とした。

世に拗ねて貧を憂へず、氣に向ねば頼まれても筆を執らぬ代り、好む事には利得に拘はらず暇を潰して、毫も生産を心に介ぬから、家の常に裕でなかつた事はいふ迄もないが、花頭は怡然として其間に、書畫骨董の古きを愛し、上代様の書に親しんで、暇さへあれば習字をしてゐた。

花頭が一生の内、最も心を籠めたのは櫻の描寫で、常に人に向つて、「櫻こそは皇國の花ぢや、異國に此種はない、さればこれを描くのは、取も直さず大和魂を現はすものぢや、然るに枕草紙にも、繪に描劣りのするものとして、櫻の花を載せられたのは、昔からこれに上手の出なかつたからぢや、及ばずながら丹青の道に志すからは、畫師冥利、一身を盡しても此花の精を得て、皇國の譽を揚げ

ねばならぬ」。これを口癖の様に云つて、毎年花の季節になると、殆ど寢食をも忘れるばかりに、筆を載せて野に山に、晝夜を別たす寫生し歩いた。

花頭に依つて、初めて其眞を描かれた櫻花は、時の好事家の間にも、未だ會て繪絹の上に、斯く迄活た花を見た事がないと迄、口を揃へて感歎せしめた。

洛西鳴瀧村の閑居に、其花頭が病んで、明日をも知れぬ境にあるのだ。

「あの、伴の先生がお見えになりました」。取次迄が待兼て、いそぐと病間へ導いた。

二

花頭は努めて褥の上へ起直らうとするのを、蒿蹊は抑へる様にして、「はて、俺に對して何の遠慮、其儘々々」、「よう来て下された、こなたの顔を見る迄は、死んでも死なぬと思ふてゐたぢや、遠路の處を御苦勞願ふて、相濟まぬ事でムツた」何を云はッしやる、俺こそ早くお見舞にも參らねばならぬ處を、手前にかまけて

御無沙汰ばかり、實はこれ程ではあるまいと思ふたで、昨日参る積りである妙法院宮様からのお召で、つい其方へ罷り出ると、相變らず詩文のお話で、遂に一日暮してしまふた様な譯、度々のお使ひで申譯がムらぬ。

蒿蹊は當時有名な國學者、近江八幡の富豪に生れたが、京に出て大佛のほとりに住ひ、居を閑田廬と名けてゐた。和歌文章に優れて、蘆菴、澄月、慈延と合せて平安の四天王と稱せられ、尚ほ漢籍佛典にも造詣が深く、豫て知恩院の六如上人と交り厚く、妙法院の眞仁法親王には、殆ど師傅の如き殊遇を辱なふしてゐた。花顛とは舊い文達で、前年出版した「近世崎人傳」五卷は、大半花顛の蒐めた材料に依つて、蒿蹊が筆を執つたのであつたが、其時、お互に最う老る年であるから、後の事は期し難い、此篇に漏れた者に就ては何方でも長生した方に、拾遺を頼む事にしやう」と中合せた。

花顛は其後六年も病つて、幾度も死にさうになつたが、漸く存らへて、但馬の

城崎へ暫く湯治に往てゐた。

「實は其間に書溜た草稿が、これだけになつてゐるのを、他の者には遺しても解らぬ、こなたに逢ふて校訂を、頼んで置き度いと思ふてな、併し最う、これで思ひ残す事はない、何卒心の儘に訂して、序に出版の折もあつたら、草葉の蔭から楽しんで、それをお待申すばかりぢや」。爾云つて枕元に堆く、片時も動かさなかつた草稿を、手づから引寄せて蒿蹊に示した。

「其儀は委細承知致した、併し病は氣からといふでな、決して弱い心を出してはならぬ、草葉の蔭といふ暇で、生てゐる目の前にとは何故云はれぬのぢや」。氣休めと知りつ、も、花顛は莞爾笑つて、「大きに左様ぢや、こなたに逢ふて頼みを果すと、急に心も軽くなつた、したが書のことだけは俺の本職ぢやで、假令他人の手を借るにしても、圖柄を見ずには好ましくない、ならば止めて貰ひ度いと思ふ」。蒿蹊は暫く考へて、「併し前篇に書が挿つてゐるので書肆の方から望むであらう

な、「それもさうぢやな、では愈々仕方がなくば、唯だ軽く描いて貰ふか」。例になく機嫌の好い顔を見て、介抱の家人も聊か愁眉を開いたが、蒿蹊はやがて暇を告げた。

嵯峨野の秋は早く更けて、夕風老の衿元に冷たく、十三夜の月が泣いた様にうるんでゐた。

三

花頭くわてんの病氣びやうきは翌日あくるひから急に革あらたまつて、最中もなかの月つきさへ起おきて見る事ことは能できなかつた。「月はよう澄すんでゐる様ぢやな、虫むしの音が何なんとも云いへぬ、伴ばんの先生せんせいに逢あふたので、俺わしも最もう何時いつ死しんでも心こころ残りのこはない、此この様な静しづかな夜よに、此儘このまゝ眠ねつてしまひ度たい様ようぢや」、「あれ又また其その様な、心細こころい事ことを仰おつし有りるものではムりませぬ、淋さびしい秋あきもツオ過すぎれば、やがて又またあなたのお好すきな、櫻さくらの春はるが來くるではムりませぬか」、「いやいや、それ迄まぎ此命このいのちが保もたうとは思おもはぬ、來年らいねんの花はなは骨ほねの上うへに咲さいて呉くれれ」、「何なんと

仰おつし有ります」、「深草ふかくさの元政げんせい上人しやうにんは、三竿さんかんの竹たけを亡なき後の印しるしにし給たまふた、木下長嘯きのしたちやうしやうの殿とのは一木ひときの松まつを植うせられた、俺わしが死しんだら、火葬くわさうにして骨ほねは川かはに流ながし、墓はかは要いらぬが標しるしばかりに、唯ただ櫻さくらの木きを植うゑて呉くれれよ。顔かほへる手てに筆ふでを求もとめて、一句いっくの辭世じせいを認しためた。

「頼たのむぞよ、柁骨たくりつにして櫻さくらの木き」それから十日餘かあまり、寛政六年くわんせいねん(百二十五年前ひゃくにじゅうごねんまへ)八月二十六日ごわつにじゅうろくにち、花頭くわてんは遂つひに六十五歳さいじゅうごを以もつて、眠ねむるが如ごとくに息いきを引取ひきとつた。

遺言ゆいごんに依よつて、遺骸たがはらは東山ひがしやまに送おくり、六如上人りくじやうにんの引導いんどうを受うけて茶毘たびに附かし、更さらに骨ほねを携たづへて嵯峨さかに行ゆき、戸南勢となせの瀧たきの前まへの流ながれに沈しづめた。——嵐山らんざんの籠かご、最もつとも櫻さくらの風かぜ情なさけある地ちであつた。

而そして又また一方ほうでは、蒿蹊かうけいを始はじめ詞友相圖しいうちあひはかつて、花頭くわてんが平素用ふだんもちひた禿筆ちびふでや、書畫しよがわの反古まごを一纏まとめにして、日野ひのの外山とやまに筆塚ふでづかを造つくり、一本ひとぽんの櫻さくらを植うて碑ひを建たてた。碑文ひぶしは六如僧都りくじよとうが撰せんして、櫻花あみくわの徳とくを頌たへたものであつた。

蒿蹊の心書しに依つて、花韻の遺稿を整理した、「續近世崎人傳」が出版される運びになつた。

書肆は果して首を傾けて、「賣物に添へる花とやら、挿畫がなうては矢張淋しうムりますな」と云つた。「そごちや、俺もさうは思ふけれど、故人の望みで成るべくなら、自分の目を通さぬ畫は、入れ度うないとの遺言ぢやでな、あの様に堅い老人の事ぢやから、筆者の上手下手よりも、時代や故事の不詮案から、若し間違ひでも描かれると、折角の書物が嘘になるとの、心遣ひからぢやらうと思はれるのぢや」、「御尤もでムりますが、それでは慙う致したら如何でムりませう、お妹御の露香さま、あの方にお願ひ申しましては」、「成程、これは好い處へ氣がつかれた、兄妹の間なら、豈夫故人も草葉の蔭から、厭といふ氣遣ひはあるまい、では愈取極めやう」。

露香は吳月溪の弟子であつたが、兄に似てやはり櫻の上手であつた。

書肆の機略は圖に當つて、慙うした経過が傳はると、一層世の好奇心を惹いて本は非常な景氣で賣れた。——正續合せて十卷、崎人の蒐めた崎人傳は、今も讀書界に珍重されてゐる。

桑岡貞佐

貞佐は兩國橋の上で、ゆくりなくも富森助右衛門に逢ふた。

「春帆殿ではムらぬか、お久しうムりましたな」、「これは平砂殿、一別以來御無沙汰申した」、「何からお話し申さうやら、常々お噂は致しながら、何處にお住ひとも承はらぬ爲、御面會の折もなく、お懐しう存じてゐました」、「拙者とても同じ事、御存じの主家凶變に依り、俄かの退散にお暇乞の隙もなく、一旦國元へ

引取ました後は、見らる、通りの姿にて、所定めぬ浪々の身の上、つい音信も致さなんだが、相變らず御健勝にて、重疊に存じ申す、「して只今のお住居は」「近頃京より下りしばかり、まだ定まる家とてもなく、聊かの知己を頼りに、厄介者の事でムれば、何れ借宅でも致した上、更めて御沙汰申す」「何卒手前の許へも是非お立寄を願ひ度い、連中も集まつてゐますゆる、久方振に一夕催し度いものでムりますな」「忝なうはムるが、諺にも申す師走浪人、最早斯く押詰つて参つては、俗事に追はれて頓と俳興も浮び申さぬ、何れ永日を期し申さう」「これは御挨拶、左様な春帆殿ではムらぬ善ぢやが、何かお急ぎの御用と見えするな、其お妨げを申しては相濟まぬが、實は手前も當春京へ上りましてな、竹平殿に逢ひましたよ」「ほう、神崎にお逢ひなされたか、それはお珍しい、何か拙者の事でも申してゐましたかな」「それに就て實は、お訊き申し度いと存じてゐたのぢやが、お手前やはり竹平殿とはお逢ひなされぬかな」「はて異な事を承はる、

子葉、竹平皆兄弟の様に致し居る間柄ではムらぬか」「さ、其處でムる、是迄水魚も昔ならぬ交りをなされた御兩所の間、どの様な思ひ違ひがあつたかは存せぬが、今更絶交杯と仰せあつては、甚だ穩かならぬと存じましてな、手前お目に懸つたら、是非仲直りをおさせ申さうと、實は其節お約束を致して歸つたのでムるが、「竹平が左様な事を申しましたか」「いかにも」「う、む、左様でムつたか、いや怪しからぬ奴でムる、己れが悪いと存じたら、自ら謝罪にも來べき筈、それに何ぞや宗匠の力を借りて、拙者と對等の仲直り杯とは、以ての外次第、其儀ならば何卒、お手を引き下され度い」「御立腹では恐れ入るが、決してこれは神崎殿から、頼まれたといふ譯ではなく、唯だ手前の考へで」「いや、御厚志は忝なふ存するが、此儀ばかりはお断り申す、悪からず」と云つて、助右衛門は何故か、師走の寒空に汗を拭いた。

貞佐も引込のつかぬ人になつて、目ばかりバチクリさせてゐると、助右衛門は

やがて莞爾と微笑みながら、「それよりも近頃、霞の句を吟み申したが、如何でムらう、

飛で入る手にもたまらぬ霞哉

お笑ひ下され。貞佐は二三度口の中に繰返してゐたが、「結構でムる」、「は、お別れ申す」。助右衛門は其儘急ぎ足に行過ぎた。貞佐は小首を傾けて、何時迄も其後姿を見送つて居た。——元祿十四年、師走十三日の事であつた。

二

翌日は彼の大雪で、貞佐の家でも雪見の句會が催された。

貞佐は元了我と云つて僧侶だったが、還俗して平三郎と改め、俳諧を好んで其角の門に入るに及び、通稱に因んで平砂と號し、後貞佐と改めた、性來律義な質だつたから、随つて親交も廣く、他門の人でも喜んで其家に集まつた、沾徳の門人大高子葉(源吾)、同じく富森春帆(助右衛門)、白峰の門人吉田白砂(忠左衛

門)等、赤穂の家中には殊に親友が多く、神崎竹平(與五郎)は自分の門人であつた。

元祿十二年三月、淺野内匠頭殿中の刃傷から、國所没收の上家斷絶、一家中四散して以來、これ等の人々とも音信杜絶してゐたのが、今年友人に誘はれて京に上つた砌、圖らずも竹平に邂逅つたので、他の人々の消息を聞くと、與五郎は同志の面々の事を、故と悪ざまに云つて、今は絶交してゐると答へた。

正直な貞佐は、それを誠と信じて、苦々しい事に思ひ、今度逢つたら自分が仲に入つて、調停しやうと約束して別れたのだつたから、富森にも其積りで話をかけたのだが、劔もほろ、の挨拶を受けて、何の事やら薩張譯が解らなかつた。

併し事實は春帆の方が、一層面喰つたに違ひなかつた。

雪の夜の句會は、貞佐の那麼談で更けた。翌れば十五日、からりと晴れた銀世界に、貞佐は夙起をして、近所の錢湯へ出懸て往つた。

何となく表が騒がしい。恰度帯を解かけてるる處へ、慌だしく表から飛込んで来た賊人體の男があつた。

「おい、皆聞たか、大變な事がおッ始まつたぜ」、「何だく」、「何だッてお前、大變なんだ、表の人通りを見や、皆高輪へ追蒐て行くんだ」、「泥棒でも逃げたのかい」、「中戯ちやねえや、泥棒どころか大變なんだ、敵討だぜおい、威勢が好いなア」、「ふうむ、それちや敵の奴が逃げたんで、これから追蒐て行く處か」、「さうぢやねえッて事よ、解らねえなア、逃げたんぢやねえや今引揚て往つた處だ」。聞耳を立て、ゐた貞佐は、もどかしさうに、「一體討つたのは誰で、討たれたのは何者ぢやな」、「那塵事解つてゐるぢやねえか、討つたのは赤穂の浪士、相手は本所の吉良様さ」、「え、ッ」。居合せた者は悉く唾を呑んだ。

解かけた帯を思はず取落した貞佐は、其手でボンと膝を叩いた。「さてこそ、發句の意が讀めた、飛んで入る手にも溜らぬ微かな、春帆は確かに討入の人数に、

加はつてゐるに相違ない、いや春帆ばかりではない、子葉も白砂も竹平も、揃つて同志に極まつた、こりや慥うしてはゐられぬ」と、再び帯を締直して、湯にも入らず、其儘表へ飛出した。

三

大路の雪は悉く蹂躪られて、道々の噂にも引揚の勇ましさは傳ばれた。

泥濘を物ともせず、一息に高輪迄走つた貞佐は、唯ある酒屋が目につくと、突如店へ驪込んだ。

「急いで進物にするのぢや、吟味して一樽詰めて貰ひ度い」。息を切らした物言ひに、小僧は吃驚して立退ながら、「へい被入ッしやい、何を差上ます」、「はて酒に極つてゐるではないか、早くして呉れ」、「へい何程差上ます」、「何程と云つて、うむ、そこにある樽ぢや、それで可い一杯詰めて呉れ」、「へい、此方は一升、此方は二升、此方で△いますと五升になります」、「はて其五升で可い、早くして呉

れといふに、「へえい」。

小僧はマゴくしてゐるのを、もどかしさうに眺めてゐた貞佐は、不圖自分の懐を押へると、大變な顔をして、「御亭主、御亭主はるやらぬか」、「はいく、御用で△いますか」と奥から出て来たのは、實體さうな年配の主だつた。

「お、御亭主、近頃甚だ粗忽の至りぢやが、實は餘り急いだので、懐中物を頼と忘れて来た、決して御迷惑は懸けぬに依つて、次迄貸しては下さるまるか」。小僧は柄杓の手を止めて、目を丸うしながら、「飛んでもない事を、大方那麽事だらうと思つた、すんでの事に諸白五升、騙り取られる處であつた」、「これく、黙りなさい、失禮な事を申し上げるものではない、お客様、何卒御勘辨を願ひます、いえ誰方にも御失念と申す事は、有勝の事で△いますから、して「誰方様で△いませうか」、「手前は貞佐といふ、名もない俳諧師ぢやが、尤も唯だ借りて往ては心許なからうから、茲に着てゐる羽織、聊か着古してはるるけれど、さるお屋敷から拜

領の品ぢや、決して人手に渡すものではないが、當座の抵當に預けて行くに依つて、何卒これで御承引を願ひ度い」。

云ふ内にも表には、義士の後を追ふ彌次馬が、潮の如くに押して行く、亭主は何か心に點頭きながら、「よう△います、決して其様な物を、お預りするには及びませんから、何卒お心置なくお持ちなすつて下さい」、「千萬忝ない、併しそれでは却つて此方が心苦しいから、これは是非預つて置いて貰ひ度い、では心急ぎゆる、これでお暇申す」。脱いだ羽織をふわりと投げて、貞佐は其儘また群衆の後を追ふた。

引揚けた義士は、最早泉岳寺の門内に入つて、表には幕府の警固が厳しく、群衆と押寄せた群衆は、門外に堰止められて雪崩を打つてゐた。

「此内に富森殿は坐さぬか、大高殿、吉田殿、神崎與五郎殿、粗酒一献參らせやうとて、貞佐これ迄參り申した、誰方にでもお逢はせ下され」。

聲を限りに呼、ハッたが、門は堅く鎖されて、警固の武士は一步も内へ入れなかつた。

四

失望と疲勞とに、張詰た氣も緩んで、ガツカリした貞佐の前へ、つかくつと進み寄つた一人の武士があつた。

「足下が貞佐宗匠でゐるか、朋友の身の上を氣遣ふてのお尋ねと見受け申すが、最早斯く警固の手配相濟みし上は、上の掟、何人たりとも對面は叶ひ申さぬに依つて、早々引取なされたが宜しからう」。貞佐の方では見識らぬ侍だつたけれど、親切な言葉の尾に附いて「誰方かは存じませぬが、格別のお情を以まして、せめては持參の此樽だけなりとも、手渡しのなります様、お取計ひを願はれませうならば、有難い仕合せに存じまする」、「はて、それとても掟の表、私の計ひはなり申さぬが、足下お尋ねの吉田忠左衛門、大高源吾、富森助右衛門、神崎與五

郎、四人の者は何れも、人數の中に加はつてゐたと存するゆゑ、御安堵あつて宜しからう」、「は、それ承はつて落着きました、此上は是非もムらぬ、お言葉に隨ひ、立歸るで△りませう」、「御心中お察し申すが、して其酒樽は何となされる」、「最早是非も△りませぬ」。

武士は意味ありけに微笑みながら、「表向取次は叶はぬ其品、足下の方にも御用ば△るまい、其儘棄て、行かれては如何ぢや」、「と仰せあると」、「はて、誰か拾ひ手があつたら、如何なる序に思ふ方へ、届かぬものでも△るまい」。貞佐は思はず乗出して、御親切なるお心添、忝なう存じまする、固より用のない此品、打棄參るで△りませう」。

心ある計らひに感じて、嬉し涙に咽びながら、悄乎と泉岳寺の門前を引揚げた貞佐は、其足で某侯の藩邸に立寄つた。

「恐れながら殿様へ、貞佐お目通りを願ひまする」、「暫く控へてゐらっしゃい」

お氣に入りの貞佐が参つたと聞いて、殿は直に目通りへ召された。
 「お、貞佐か、よく参つたな、何か用事か」、「斯様な風體で、お目通りを願ひ
 ました段、恐れ入り奉りまする」、「は、は、は、身装などに構はぬが風流の道では
 ないか、何と致した」、「恐れながら殿より拜領のお羽織、御紋服を質入致しまし
 た、お詫の爲に罷り出ました」、「それはまた如何なる仔細ぢや、それ程手許逼迫
 と申すか」、「中々以まして、左様な次第ではムりませぬぞ、若しまた如何なる事
 よりして、御上聞に達しまいものでもムりませぬゆゑ、念の爲お届けに参つたの
 でムりまする」。

篤實な貞佐は、全く冷汗を拭ひながら、恐れ入って事の顛末を言上した。殿は
 機嫌よく大笑ひをされて、「は、は、は、それはよく致した、よい、よい、態々届けに
 参つた心底が氣に入つたぞ」、「恐れ入ってムりまする」、「併しそれでは寒からう、
 當座の褒美として、之を遣はす」。新たに又一枚の羽織を拜領して、貞佐は上々の

首尾で邸を退つた。

五

翌年春、赤穂義士が死を賜ふて後、子葉、春帆等の師沾徳の合勸堂で、追悼句
 會の催された時、貞佐の手向た句は

其骨の名は空にある雲雀哉

といふのだつた。貞佐の句風は、

出て三日人なら如何に猫の戀

鯨の目ふびんに見ゆる牡丹哉

神風やさはると孕む稻の花

芝蝦の髭も穂に出る今日の月

といふ様なのだつたが、或時野分の句を吟むとて、「何事もなき野分跡」と、十二
 字はすらくと出来たが、上五が何うしても出ないので、幾度も繰返して苦吟し

てゐた。

「貞佐殿、御在菴か」と表に訪れる聲が聞えた。

「お、聒々坊、ようこそ見えられた、さアお通り下され、」
「過般來は御無沙汰しました、お變りもムらぬかの」と會釋しながら座に通つたのは、貞佐がまだ寺にゐる頃からの親友で、また俳諧の仲間だった。

貞佐は早速茶を煎じながら、まだ口の裡では、例の十二字を繰返してゐた。

「時に過日の嵐は、大變でムツたな、此方家にゐさしやツたか、」
「されば其事ぢやて、實はそれに就て今苦吟してゐる處ぢやが、併し御坊の方は如何でムツたな、」
「何有少しばかり垣根を倒された位で、大した事はムらぬが、苦吟といふは發句の事かの、」
「左様ぢや、俺はあの時、生憎家にゐなかつたのじや、尤も俗用でな、泊り掛で親戚へ往てゐると、夜半からあの嵐ぢや、往た先は高臺で、風の當りが酷いわ、樹木は倒れる、屋根は飛ぶ、家の事も氣になツたが、歸るにも歸られず

遂う明方迄、まんじりとも寝られぬ騒ぎぢや、朝になつて風も風いだので、匆匆立歸つて見ると、陋巷に住む有難さ、家は何事もなかつたて、
「それは何より重畳であつた、」
「そこで一句吟かけたのぢやが、何うも上五文字が巧く納まらぬので、今もいふ苦吟してゐる處ぢや」。

聒々坊は其十二字を聞いて、暫く考へてゐるが「成程、これは其時の眞情ぢやな、」
「我宿はとも考へたけれど、餘り初心過ぎるでな、」
「固より、野分の意、其時の情は、此十二文字で盡してゐるからな、無理に字数を合せやうとすると、却つて二義に亘つて宜しくあるまい、寧ろ上五は思ひ切つて、すらくと出た其儘の方が、本統の俳諧ではあるまいか。」

貞佐は喜んで其意見に隨ふた。

何事もなき野分あと

僅か十二字の俳句は、當時にあつては無論破天荒の試みであつた。貞佐の歿後

門人が其遺著に「野分跡」と題したのは、これを傳へたものであった。

享保十九年(百八十五年前)九月、六十五歳を以て歿した。辭世、

中腕に白粥盈てり十三夜。(此項終)

華山と長英

華山の方から、態々長英を訪ねて往った。

「突然ながら、奥村から聞いて参ったのだが、近頃新しい西洋の地圖が、お手に入ったさうでゐるな、何卒拜見致し度いもので、」何事かと存じたら、其爲に態態お越は恐縮千萬、一言仰せ下されば、手前から持参致しましたものを、「いやいや、それでは却つて恐れ入る、拜見は拙者よりお願い申すのだから、罷り出

るは當然、決して其御斟酌には及び申さぬ、」はて毎もながらお固い事で、先づ先づお寛ぎ下され度い、只今持参致すでらう。

會釋して奥へ入った長英は、間もなく一幅の大地圖を持出して、手づからその楯間へ懸けた。

「ほ、う、これは中々美事なものでゐるな、よい物をお手に入れられた、」何かの参考にも相成らうかと、長崎表の朋友より、送り呉れましたものでゐる、」何様、彼地でなくては得られますまい、拜見致す。膝行寄つて、又立上つて、右から左へ、上から下へ、傍目も振らず眺め入った華山は、偶と心付くと振返つて、「精しく拜見致す間、何卒お構ひなく用事をお果し下されい、」いや、別に差支る用事とてもゐらねど、却つてお邪魔かとも存じますれば、暫く御免を蒙つて、彼方でお待申すでらう、」實は拙者も其方が勝手にゐるから、何卒左様お願い申し度い。互に氣質を知つてゐる同士の、別段遠慮する事もなく、長英はやがて

書齋に退いた。

午になつても午後になつても、華山は地圖から目を離さなかつた。女中が長英の書齋へ来て、「申し上げます」、「何事ぢや」、「あの、お客様は、まだ彼方に在つしやいます」、「それは當然ぢや、何うか致したか」、「いえ、何うもなさりは致しませぬが、お茶を差上げましたも、召上りませぬ」、「うむ」、「最早時分も過ぎました」、「お膳部は差上たであらうな」、「はい、最前差上りましたので△いますが、それにもお手をお付けになりませぬ」、「は、左様か、餘程地圖がお氣に入つたと見える、無理にお勧めして、妨げになつては相成らぬから、やはり其儘、そつと致して置くが可からう」、「左様で△いますか」。女中は奇異さうな顔をして退いた。

日が傾いて、室内が薄暗くなつてもまだ、華山は地圖から離れなかつた。

「はッは、いやよく相解つた、お蔭で思ひの外に學問をしたよ」。突然高聲に

笑ひ出したので、燭を持つて往つた女中は、驚いて次の室に立佇んだ。

「お、最早斯様な時刻になつたのか、飛んだ邪魔を致したな」、「いえ、何卒御緩りと遊ばしまして」。女中は薄氣味の悪い顔をして、匆々に退つて往つた。

華山が書を繙くに刻を覺えず、會心の處に至ると、眞夜半でも唯だ一人、阿々と大笑して、四隣を驚かす事は珍しくなかつた。

二

華山は渡邊氏、名は定靜、字は子安、通稱を登と云つた。

三州田原の藩主三宅土佐守に仕へ、寛政五年江戸藩邸のお長屋に生れたが、少にして大志を抱き、藩儒鷹見爽鳩に就て書史を涉獵し、兼て洋學を學んだが、生れついて畫が巧手だつた。

田原は僅か一萬五千石の小藩で、華山の家は殊に微祿であつたから、彼は生れながらにして貧苦と鬻はねばならなかつた。

親切な先輩が、「渡邊、貴公は學問をして、儒者になる積りの様だが、其志はまことに宜い、併し今、齒に衣被せずにいふと、貴公の家は貧乏だ、其上祿の薄い儒者の學問をするよりも、寧ろ巧手に生れついた畫の方を勉強して、早く裕かになる工夫をしては何うだな」と、見兼ねて懇ろに云つて呉れた。

親孝行で評判だった華山は、暫く俛首れて考へてゐるたが、熱々と溜息を漏らし、「よく仰せ下された、儒を學んで、天下の爲にならうとは存じまするが、父母の飢寒を餘所に見るには忍びませぬ、御意見に従ひ、姑く畫の方の修行を致すで、ムりませう」いふ目の裡には、涙が一杯に溜つてゐた。

其人の口添で、谷文晁の門に入つたが、固より良紙を求め資もなく、僅かに十六文乃至二十文の小錢を以て美濃紙を購ひ、それに描いて日々稽古を勵んだ。晩年には諸派を折衷し、古法に則つて、自ら一家の風を興したが、而もまだ大きな志は他にあつた。常に人に曰ふにも、「畫を沽つて活計の資を求めると

は、唯だ己むを得ぬからで、一日畫を描かすにあれば、忽ち一日の窮を増す、一身の窮は忍びもするが、母や家人の困る顔を、平氣で見ではゐられぬと、口癖にして、僅かに自分への辯疏にしてゐた。

此志はいつか藩主の認むる處となつて、天保三年の夏、特に祿百石を加へて年寄格に擢でられ、初めて藩政に參與する事の能る身分となつた。——時に年四十であつた。

藩の重役として、領内巡視の爲、田原へ歸つた華山は、沿岸地方を經歷して何よりも先づ、海防の急がせに能ない事を察し、自ら海外諸國の旗章と、軍艦の圖とを作つて、沿海警備の役人に示し、時勢と地理との關係を説いて、吳々も倫安を警めた、田原は遠州灘を控へて、伊勢灣に入る航路の要衝に臨んでゐた。

江戸に歸つてからは、益蘭學を修め、旨として西洋の事情を知るに努めたが、尙ほ事務と畫債とに追はれて、専ら力を洋書に濺ぐ事の能ないのを憾みとした。

當時繁々往復して、最も深く交はつてゐたのは、長英だつた。

三

天保九年十月十五日、華山は長英と一緒に、尙齒會へ出席した。——會は當時の新知識、若しくは先覺者と稱せらるゝ人々を以て組織され、時事を談じ、意見を交へる、云はゞ一種の政治的俱樂部で、尙齒會と云つても世の常の、老人連が舊交を温める爲に設ける會合とは、全然性質を異にしてゐた。會員は各方面に亘つて、直參もあれば藩士もあり、醫者も儒者も僧侶もあつた。長英の門人に田彌太郎、奥村喜三郎の兩人、孰れも幕府の御家人であつたが、才學があつて算數に長じてゐた。喜三郎は自ら携へて往た風呂敷包から、一つの圓いものを取り出した。

「地球儀でゐる、拙者新たに試みたのでゐるが、幸ひの會合に、各位の御批判を仰ぎ度いと存じて、是迄持參仕つた」。華山は膝を叩いて點頭いた。長英が新地圖

を手に入れた事を、最初に告げて呉れたのは、此奥村だつた。

「實は我國の航海術は甚だ未熟で、動もすれば船を覆へし、人命を傷ふ事も尠くムらぬ、乃で外國の進んだ術を究める事が必要でゐるが、それには先づ完全な地球儀から製へてか、らねばならぬと存じて、これはホンの戯作、併し各々の御批判に依り、何かの參考にもなる様でムれば、柳營へ献上も致し度い存念ゆる、先づ御覽下されて、御腹藏なき御意見を仰せ聞けられ度い」と、喜三郎は更に説明を加へた。

「結構なる思付、一段でゐる」と、既に其眞價を信じてゐる華山は、進んで推奨の音頭を取つた。無論反對する者は一人もなかつた。

夜に入つて會は益盛んに、國事を憂ふる人々の談論は、風發して燭を搖がすの概があつた。

遅れ馳に參會した芳賀市三郎は、近頃幕府の巡見使として、上野、下野、甲斐、

信濃の諸國を歴遊して歸つた、土産話に花を咲かせた。

「それよりも實は茲に、一大事がゐる」と、市三郎は偶と聲を潜めた。一同何事かと息を呑む目の前へ、市三郎は竊かに懐中から、一通の書面を出して示した。

「長崎に在る和蘭船の甲比丹から、奉行久世加賀守殿へ訴へ出た書面の寫してゐるが、これに依ると英吉利の海將モリソンなるもの、日本の漂流者七名を護送し來り、長崎を経ずして直ちに浦賀へ向つたと申す事、いふ迄もなく事に托して、交易を求めん底意は明かとの注意でゐる、久世殿より早打を以ての進達に、營中の評定は鼎の沸くが如くでゐるが、何分御老中筆頭水野越前守殿、御承知の氣象を以て、宜しく文化年中に參つた、魯西亞の使節レサノットの例に倣ひ、早々逐還すべしとの意見と承はるから、これは容易ならぬ儀でゐるぞ。」

華山は長英と顔を見合せた。

四

市三郎は尚ほ語を繼いで、「御評定の有様も、聊か漏れ承はつてゐるが、只今も申す如く、越前守殿の威勢強く、他の方々の分別とても、元來確とした根據があつての議論ではゐらぬゆゑ、結局は附和雷同、形の見えぬ影に驚き、燃える薪に油を濺いで、英吉利人を奸賊呼はり、表に交易を乞ふと稱して、實は邪教を播めん下心と誣ふる者もゐれば、其尾について又助けた漂民といふも實は人質同然これを囮にして妄に江戸表近くへ參る、其意は容易に測られぬと、物々しく分別する人もムツで、只今の處、小の虫を濟ふ爲に、大の虫を殺すは策の得たるものでない、僅か七名の命を助けんとて、天下萬民を傷ふてはならぬから、一舉に驅逐する外はないと、略大勢は決つた容子でゐる」と、四邊を憚りながら、聲を収めた。

一座白けて寂然とした裡に、華山は吻と太息を吐いて、「拙者少年の頃長崎に在つて、和蘭人から聞いた事がゐる、其モリソンと申すは、英吉利に於ても有名な

人物、著書の如きも既に舶來して、現に御本丸の書庫に納まつてゐる筈、固よりレサノツトと同日に論すべき人物でない、今其當人が參るといふは、何さま容易ならぬ事でゐるが、柳營に人なく、外國の事情に疎い爲、英吉利人を海賊の如くに心得、左様な暴論をも吐くのでゐらう、さりながら萬里の風波を冒して、遙々渡航したものを、故なくして追拂は、他日の怨を買ふ事はいふ迄もゐらぬ、我等不肖を顧みず、豫て外國の書を講ずるのも、斯る場合の爲でゐれば、斯程の大事を聞きながら、見す／＼國を危きに、導かる、儘には棄て置かれ申さぬ、高野氏、如何でゐるな。——長英は自分の云はんと欲する處を、華山が悉く云つて呉れた事を告げた。

華山の「賦舌小記」、「憤機論」、「蕃論私記」、「長英の「夢物語」杯が出来たのは、それから間もない事だつた。併しまだ一般には公にせず、窺かに唯だ同志にだけ示したのだが、一犬廬を吠えて萬犬實を傳へ、世上へ秘密にされたゞけ、一層危

險な書物の様に、世人からも其筋からも思はれた。

長英は高野氏、名は讓、瑞臯と號し、文化元年端午の日、奥州膽澤郡水澤に生れた。幼名は悦三郎、實父は後藤實仁と云ひ、其三男であつたが、十四の年、叔父高野女齋に養はれて、郷齋と改めた、女齋は水澤の邑主伊達將監の典醫であつたから、長英も當然醫を學び、同時に略蘭學にも通じた。漢學は兄直之進の義父坂野長安に授けられたが、十七の年、直之進が江戸へ遊學に出ると聞いて、羨ましさには堪へず、一緒に遣つて貰ふ事を願ふたが、まだ幼年の故を以て養父は容易に許さなかつた。

無斷で飛出さうとしても、旅費がないので困つてゐると、恰度天の與へともいふべき好機が來た。

五

「郷齋 今夜は頼母子講があるのぢやが、俺は少し差向へるで、お前代りに往て

呉れ。女齋は何の氣もなく命じた。

長英も其時は、別に考へもなく、唯だ命ぜらる、儘に參會したのだが、首尾克く籤を引當ると、即座に十五兩の金を受取つたので、偶と氣が變つた。悪い事ではあるけれど、これだけあれば江戸へ行く旅費には充分だ、天が自分の志を察して、機會を與へて呉れたものであらうと、其足で直ぐ坂野家へ驅込み、兄直之進に何うでも一緒に連れて往て呉れと強請んだ。

坂野の家では棄置けないので、竊かに女齋の許へ通じ、同時に當人の決心を告げて、種々執成して呉れた結果、女齋も其篤志を憐み、それ程迄に思ひ込んでゐる事ならと、遂に快く願ひを容れ、更に學資をも給して呉れる事になつたので長英は初めて兄と共に、喜び勇んで江戸へ出た。それは文政三年の秋だつた。

堀留の藥種屋神崎源造が、養父女齋と舊友だつたので、先づそこへ頼つて行くと、我子の様に可愛がられ、其口添で中橋上横町に、當時有名の蘭醫吉田長叔

を師と頼んだ。

長叔は蘭法の内科を、初めて日本に播めた名醫で、また篤學を以て知られてゐたが、長英の才を愛して、我稱の一字を與へ、郷齋を改めて、長英と名づけた。

螢雪三年、學業大いに進んだので、長英は久振に郷里水澤へ歸つた。養父の喜ぶ顔を見やうと、懐しい我家の門を潜ると、意外にも女齋の機嫌は散々だつた。

「ナニ郷齋が歸つたと、左様な事はない筈ぢや、一旦志を立て、江戸へ出たものが、僅か二年や三年の修行に、慢心して歸る道理がない、若し歸つたが實なら其様な子は子とも思はぬ、逢ふ事はならぬに依つて、早々追歸しなさい」。

長英は悄悄として坂野家へ立越えたが、養父の言葉に感奮して、逗留僅か三日の後、再び江戸に引返して、長叔の門に學びを續け、傍ら駒留正見の門にも遊んだ。

尚二年ばかり勉強してゐる内、長崎の醫者で暫く江戸に滞在してゐた今村甫庵

が、近く發足して郷里へ歸るといふ事を聞いた。

當時に於ける新知識の源、長崎は豫て長英が、憧憬の的になつてゐた、幸ひ甫庵とは識る仲であつたから、是非共之に同行し度いと、長叔、正見、源造等にも相談すると、孰れも賛成して呉れたが、何分にも發足の日が迫つて、足許から鳥の立つ様な俄かの思ひ立ちに、此事を水澤へ報せて、養父の允許を得る暇がなかつた。

俠氣のある源造が、豫て長英から蘭方の製劑法を授けられた事のあるのを徳として、後事は勿論旅費學資迄、一切を引受けて呉れたので、郷里へは一通の書面に、專斷の詔を言ひ送つて、文政七年の夏、甫庵と一緒に江戸を立つた。

六

秋八月、長崎に着いた長英は、直に蘭醫シーボルトの塾に入つた。

シーボルトは當時廿二、長英より僅か一つ年上の青年であつたが、術は殊に優

れてゐたので、夙く長崎奉行の認むる處となり、特に我患者の診療を許されてゐた。塾には諸國の醫書生が、風を望んで來り投じ、高良齋、伊東立村、戸塚靜海、伊藤圭介、竹内女同等は皆同門であつた。長英は醫術の傍ら、努めて各方面の蘭書を涉獵した。

江戸の源造の許から飛脚が届いた。書面を見て長英が先づ驚いたのは、恩師吉田長叔が、長英の江戸を立つて間もなく、加州老公の病に招かれて、金澤へ赴く途中疾を發し、強て行を續けて、終に同地に客死したといふ計報だつた。

江戸の醫者山田某が、駈落をして肥前平戸にゐる、松浦侯に仕へて國政に參與し、名も松原見村と改めて、權勢盛んだといふ噂、藥價の貸が五十兩あるから、代つて催促して呉れて、若しも取れたら、學資の補足に遣つても可い、といふ様な事も認めてあつた。

長英は塾の暇を計つて、一日平戸へ渡つて見た。成程立派な構へで、堂々と門

戸を張ッてるる、主人に面會を求めて來意を告げ、源造からの別書をも示した。見村は、「左様な事もあつたかも存せぬが、彼舗とは種々錯綜ツた取引もあるから源造に會ツた上でなくては、支拂ふべきものか否かも解らぬ、何れ遠からぬ中江戸表へ參るに依ツて、其節話はつける」と申したと、序に云ひ送ツて貰ひ度いと、不得要領に胡魔化さうとした。

長英は心の裡で「守錢奴、拂ふ氣はないな」と思ツたが、故と當惑した顔を見せて、「それは近頃困ツた事になりましたと、實は源造殿から頼まれたとは申すもの、此金は小生學資に貰ひましたもので、若しもこれが頂戴能ぬとなると、忽ち難澁を致すのは手前で、折角修業の望みをも棄てねばなりません、固より學資の事でムれば、今一時に纏めてお貰ひ申さずとも、月々衣食の料にさへ、差聞へねば宜しいのでムるが」と、それとなく心を惹いて見た。

見村は道がに氣の毒さうな顔をして、一寸考へてゐるたが、「蘭學の修業をしてム

るのだな」、「左様で」、「では怎う致したら如何であらう、藩侯お手許に、數多の蘭書を貯はへてムるが、誰も之を讀得る者がなく、徒に倉庫に藏ひ込んである、足下それが讀めるなら、翻譯して差上げる事にすれば、それに依ツて御扶持を頂戴出来る様、拙者計らツて進ぜるが」。

長英は心中大いに喜んだ。那麼事が能るなら、固より願ツたり叶ツたりであるから、早速承諾して、再び貸金の事杯は云はなかつた。

七

シーボルトの塾に二年、傍ら松浦侯の藏書の翻譯をして書籍にも衣食にも不自由なく、充分に勉強する事の能た長英は、自づと學業も大いに進んで、後には通事の吉田權之助を輔けて、塾の翻譯教授を掌る迄になツた。

文政九年三月、和蘭の甲比丹ステュルレルが來貢して、江戸へ赴くに際し、通譯としてシーボルトも従ふ事になツた。

長英も最初は同行する積りで、久し振に歸省する事を云ひ送ったが、又思ひ返して、尙研究を續ける爲、更に一年の猶豫を乞ふた。これが爲長英の一身に、幸と不幸と交々到る様な事があらうとは、無論其時は知る由もなかつた。

やがてシーボルトは歸つて來た。荷物の中に國禁に觸るゝ、日本實測圖の入つてゐる事は、當時誰も知る者はなかつた。

幕府の書物奉行で、天文方を兼てゐた高橋作左衛門景保、夙に外事を研究して、憂國の志が厚かつた。石町の宿舍長崎屋源左衛門方に、シーボルトを訪ねて、内外の談の間に、同人が所藏の圖書を觀て、之を獲れば國家の利益になる事が多からうと何物に代へても懇望の旨を告げた。シーボルトは之に對して、日本内地及び蝦夷の地圖が欲しいと云ひ出した。

追がの作左衛門も、此難題には當惑したが、行懸り上厭とも云へず、竊かに下役に命じて、伊能勘解由(忠敬)の作つた小圖を寫させ、地名を削つて之と交換した。

當時は誰も知らなかつたが、其後屢々作左衛門が、外人と文書を往復してゐた事から、其筋の注意を受ける様になり、漸次足がついて遂にシーボルトの許へ、家宅捜査の役人が向ふに及んで、事は悉く發覺した。

疾く此機を察した長英は、竊かに塾を去つて、暫く薩摩に身を逃れてゐたので、連坐の厄を免れたが、シーボルトは直ちに日本を逐はれて長崎を去り、十一年十一月、江戸で作左衛門が捕へられると間もなく、檢擧の手は長崎へも延びて、翌年正月に、良齋を始め、塾の主立つた者は皆連累を喰つた。

作左衛門は吟味中、二月に遂う牢死を遂けたが、四月に至つて一件落着、志は酌むべきだけけれど、行ひは若し生てゐれば死罪に當るとの判決を下された、享年四十六だつた。

越えて六月に至つて、シーボルトの塾生も、漸く赦されたと聞いたので、長英

も再び長崎に歸つた。

歸つて驚いたのは不在中に、郷里水澤から養父女齋危篤の報を齎して、門生の小野良貞が遙々長英を迎へに來てゐた。而も居所が知れない爲、方々捜してゐる中に、遂う養生が叶はなかつたと追躡の飛脚が着いてゐる處だつた。

八

初め養父の意に逆らふて迄、無理に江戸へ出て以來、轉々して前後十年、其間長英は、遂に一度も養父の顔を見なかつた。而して再び永久に、見る事が能くなつたのだ。

良貞から其話を聞いた時、遠がの長英も潸然として、暫し涙に搔暮れたが、面を擡けると、「何事も天命ぢや、先年書面を出した時、直ぐに歸つてゐたならば、せめて御無事の中にお顔も見られたであらうが、さすれば必ず此度の事件に連坐して、今安穩にはゐられまい、まだしも其お歎きを、懸けなんだのが、心のかせぢ

や、御臨終の間に合なんだ不孝の罪は、やがて身を立て家を興し、泉下のお名をも揚げる事が能たら、草葉の蔭よりお許し下さる時節もあらう」、「よく仰有つて下さりました、其お志で先生も、嚙御満足で忝りませう、何は兎もあれ、早速御同道申上ませう。良貞も涙を吞んで歸郷を慫慂めた。

「いや、俺は水澤へは歸るまい」、「何故で忝ります」、「父上恚うして遙々、俺の修行をお許し下されたも、皆將來に期する處があられたからぢや、今將に業が成らんとして、父上既にお歿れなされた事は、何とも以て残念の至りぢやが、事茲に及んでは、今更水澤へ歸つても何の甲斐があらう、俺の學問した處は、大抵翻譯して行李に收めてあるで、これから江戸へ出て、世に示さうと思ふてゐる處ぢや、家を立てるよ江戸でなければならぬ、母上始め皆の者は、江戸へ引取れば可いではないか」、「成程、一應は御尤もの様にも聞えまするが、お國には御主君が忝りまするぞ、其君に背き家をお棄てなされては、恐らく忠孝の道にお缺けなさ

りは致しませぬか、「人の志は各自別ぢや、お前のいふのは眼前の小事、俺の志は國家にある、而して今は最も大切の時ぢや、草深い水澤の小天地に埋れて、一生を朽果る様な事があつては、却つて父上へ不孝になる、皇國の爲に盡す事が出来れば、それが君への忠義ではないか、讓は江戸で家を興す迄は、郷里へ歸る面目を有ませぬと、お前から母上には傳へて呉れ」。

決然と云切られては、また翻へすべき術もないので良貞は悄々と、獨りで歸るより外はなかつた。

長英も後から江戸へ歸つて、麴町に居を構へ、醫療と翻譯とに従事した。勤學の功空しからず、長英の名は忽ち知られて、四方より集る客が、門前に市をなした。

翌れば文政十三年、天保と改元あつて、世の中は益々騒々しくなつて來た。華山と初めて知つたのは此年で、時に長英は二十七、華山は三十八だつた。

華山は長英の才を愛して、藩侯の隠居友信に薦めて、其蘭學の師とした。

九

此頃長英の許へ、繁々訪ねて來る武士があつた。

花井虎一、幕臣ではあるけれど、奥村喜三郎、内田彌太郎等の友人だといふので、長英も別に氣に留めず、普通に交際つてゐた。

多少外國の事情も聞嚙り、同志の消息にも通じてゐる容子で、顔さへ見ると時事を論じ、故らに聲を大きくして、當局の措置を罵つたり、さもく國を憂へる様に、激越の調子で慷慨するので、これが幕府の犬であらうとは、遠がの長英も心付かなかつた。

外國嫌ひの閣老水野越前守の下には、更に輪をかけた外國嫌ひの監察鳥井耀藏があるた、彼は林大學頭之三男で、頑冥固陋は父祖傳來だつた。外國との交渉が頻繁になつて、海防の必要が益々切なるに及んで、幕府は耀藏に命じて近海の船

船、砲臺を巡視せしめ、下田奉行で事に馴れた、江川太野左衛門を介添にした。耀藏は常に左右に向って、「モリソンといふ毛唐奴、あれは日本を欲しがってるのぢや、審學の奴輩其害心を知らず、妄に異國を尊信して、自ら輕しめるのみならず、故らに彼の強きを唱へて、愚民を惑はし、公儀に對して、脅迫がましい振舞をなすとは、言語に絶えた不届ぢや今に於て慎機論や、夢物語の作者を引捕へ、重き所刑に行はねば、後の懲しめに相成らぬ」といふのが持論だつた。

太郎左衛門は豫て華山や長英とも親しく、現に這回の事に就ても、佐渡奉行川路左衛門尉杯と一緒に、幕府に上書して攘夷を諫めた位だから、耀藏の下に介添として、意見の合ふ筈はなかつた。太野左衛門は病と稱して、一緒に仕事をすることを避けた。

耀藏の方では結局それを好い事にして、自分の手で小笠原貢藏といふ、曾て暫く蝦夷の固めに従ひ、少しは外國の事も知つてゐるといふ者を呼寄せ、房總海岸

の測量に當らせた。處がこれが喰はせ物で、仕事は杜漏、出来上つたものは誤りだらけ、逆も物の役には立たないので、已むなく太郎左衛門が乗出して、計數に長けた彌太郎、喜三郎を以て代らせた。

貢藏はそれを憤慨して、先づ喜三郎を耀藏に讒言した。耀藏も同じ心だから、忽ち喜三郎は斥けられたが、まだ彌太郎が残つてゐて、これは測量に不馴だつたけれど、數學に精しかつたので、一生懸命に勉強した結果、僅二ヶ月ばかりで、兎も角も役目を果した。

貢藏は引込みのつかない男になつて、一途に報復の手段を回らした結果が、曾て同僚だつた虎一に、片棒擔がせる事になつたのだ。

「何でも洋學の奴等の密事を聞出して、一網に擧げる事が出来たら、屹度重く用ひられる様に計つてやるが、一肌脱いで働く氣はないか」。

虎一は一も二もなく承知した。

「時に高野氏、小笠原島の件は如何になりましたな」。虎一は何氣ない體で、長英にカマを掛けた。

「小笠原島の件とは」、「はて何事も存じて居りますよ、併しお氣をつけなさらぬと、公儀の盲役人共、些細の事を枷にして、如何なる宛の企みを、致さうも計られませぬぞ」、「ほう、手前一向に存ぜぬ事ぢやが、御注意は忝ない、尾花を見ても幽霊と傳へる、油断のならぬ當世、お互に用心は肝要でゐる」。長英は唯だ、笑ツてさう云ツた。

虎一が囨に出した小笠原島の件とは、當時洋學の仲間、小笠原島を拓いて殖産を講じ、國家の用に充やうと、幕府へ建議する計畫があつた、それを聞嚙ツて長英の口から、巧に實相を引出さうとしたのだツた。

「足下御存じない、それは重疊でゐるが、拙者或る筋より聞込みました處に依れ

ば、これには大名方の尻押もあるやに傳へられて、公儀に於ては容易ならぬ事と足下等にも目をつけてゐる由にゐれば、折角お氣をつけなされませよ」、「は、、、それも風聲鶴唳でゐらう」、「全く風聲鶴唳、それに違ひゐりませぬ、總て當時の政道、水野越前守を始めとして、下々の盲役人、皆風聲鶴唳に驚いて、浮足に騒ぐ蠅虫ばかり、公儀に一人の人物なきは、歎かはいしい事でゐりますな」、「それと申すも、我等の力が足らぬからぢや、二百年の泰平に馴れて、上も下も、長夜の眠が覺めぬからぢや」、「眠と仰せあれば、夢物語は如何になりましたな」、「如何にもなりませんぢや」、「拙者不幸にして、未だ拜見の榮を得ませぬが、若しお手許にゐるなら、内見お許し下さるまいか」、「は、、、痴人の説く夢物語、他哩なものでもゐるわ」、「いやそれを拜見して、拙者も長夜の眠を覺し度うゐりまする」。長英は何の氣もなく、手篋から一部を出して示した。

「後學の爲、寫本して所持し度いと存じまするが、暫時拜借願はれませうか」、

「宜しうムらう」。

天保十年の夏、洋學者の大檢舉が行はれたのは、それから間もない事だつた。密告者が虎一である事はいふ迄もない。彼は自己の功を大きくする爲、貢藏を通じて耀藏の許へ、「近頃蕃學の徒輩、無人島を開拓すると稱して、竊に異國と交りを結ばんと致して居りまする、一味には上に島津、黒田、三宅、(華山の主)兩松平(伊勢守と内記)の諸侯を戴き、旗本に下曾根金三郎、江川太郎左衛門、羽倉外記、下ツて渡邊華山、高野長英、其他僧侶には常陸無量寺の住職、町人には石町の宿屋彦兵衛、蒔繪師秀三郎等加盟なし、彼の奥村喜三郎専らこれを助けて、船出の日取も近日に迫ツて居りまする、一日延れば一日の禍、今の内に根を絶つて、葉を枯さねばなりません」と告げた。耀藏から越前守に取次がれたので、忽ち事は大きくなつた。

一一

華山が捕はれたと聞いて、長英は逸早く姿を隠した。留守宅へ踏込んだ捕方は數多の文書を押収して去つた。而して厳しく其行方を詮議した。

長英は暫く旗本下曾根金三郎の邸に隠れてゐたが、逆も免れる事の能ないのを知ツて、後事を鈴木春山に托し、自ら北の町奉行所へ名乗ツて出た。春山は華山と同じ田原の藩士で、華山の紹介に依り、兵書を長英に學んだ、有爲の士であつた。

太郎左衛門、外記、喜三郎、皆一應の吟味を受けたが、小笠原島の件は、開拓の計畫は事實だけれど、外國に欺を通ずる杯とは、悉く虎一の虚構で、華山や長英は彦兵衛等を知らず、太郎左衛門、外記、喜三郎等は、開島の議にさへ與つてゐなかつた事が判つたので、其件はやがて落着したが、華山と長英とは宥されなかつた。

白洲へ呼出された長英は、自若として吟味與力に對した與力の手には虎一に貸

した、「夢物語」の稿本が持たれてゐた。

「其方、此書物に覺へがあるか」、「如何にも、手前が書いたものに相違ムらぬ」、

「左様か、夢物語とは夢中の事を記したものであらうな」、「先づ左様でムらう」、

「それにしては書中に、英吉利の人情風俗を、詳しく記してある様だが、其方何

時か彼國へ、渡航致した事でもあるか」、「未だ參つた事はムらぬ」、「然らば何者

に聞いて書いたか、有體に申し上げろ」、「はて斯程の事、何者に聞きませうや」、

「申すな、自分で參らす人にも聞かず、如何にして斯様な事解るか、それとも荒

唐無稽の事を聯ねて、世を惑はす爲に作つたと申すか」。

茲に至つて長英も、色を作して肩を聳やかして、「以ての外の仰せ、然らば世上

天に昇り、地に潜つた者がムらうか」、「戯けた事を申すな」、「いや戯れではムら

ぬ、未だ曾て天に昇り、地に潜つた者のあるを聞かぬに、よく天地の理を説く者

のあるは何故でムらうか」、「うむ」、「況して英吉利の如き、自由に船の通ふ處

其國情を知る位、何の不思議がムらうや」、「控へろ、今日の調べはこれ迄、追て

呼出す間、神妙にして立ちませい」。逆も言葉では、罪に伏せしめる事が能ないと

知つて、此上は牢舎の苦しみに、自ら服罪するの時を待つより外はないとなつた。

華山も同じく著書を種に、政道を誹謗する者として、嚴重な調べを受けた。華

山の著書には、政治の機密に關する様な問題迄が、遠慮なく批評されてあつたの

で此點が最も幕府の忌諱に觸れた。

著作の動機は尙齒會に於ける、芳賀市三郎の言に感奮したものの、時事に關しては

司天臺の譯官、小關三英から知つた處が多かつたが、華山は唯道路の説に聽いた

とのみ答へて、市三郎や三英の事は、噤にも出さなかつた。

一一一

白洲に於ては、辯論決して屈しなかつた長英も、薄暗い牢舎に歸つて、熟々行

末を考へると、いくら楯を衝て見ても、權力を有てる役人には、到底勝てない

事が明かなので、次に呼出された時は、見違へるばかり神妙になつて「何事も總て、國を憂ふる衷情から致した事で、決して他に心あつての儀ではムらぬ、其邊お酌量下されて、何卒寛大の御處置を、偏へにお願ひ申し度うムる」と折れて出た。

華山に材料を給した三英は、長英がまだ吉田長叔の門にあつた頃、同窓に學んだ先輩で、出羽庄内の産、後岸和田の藩醫に聘せられたが、脚を疾んで、起居の自由を缺いた爲、家に籠つて蘭書を講じてゐたのを、更に司天臺に召されて、幕府の和解方に擧げられたのだつた。華山が捕へられたと聞くと、自己も免れざるを知つて、不具の生恥を曝さうよりはと、五月二十三日享年五十三を以て、美事に自裁して果た。

其年も押詰つた師走二十八日、華山と長英とは、同時に白洲へ呼出された。兩人共書を著はして、時の政治を誹謗し、上を畏れざる段、死罪にも當るべきの處

長英は自訴し出した庶を以て、華山は先年飢饉に際し、領民を恤み遣はした計ひ、神妙とあつて、共に一等を減じて終身禁獄、尤も華山は三宅土佐守の家來なるに依り、主人家來に引渡し、國表に於て蟄居仰付らる、といふ宣告であつた。

此判決を下す迄には、幕府でも餘程苦心した事は明かだつた。現に華山の判決文に見ても、「其方主人領分三州田原は、遠州洋中に出張候場所にて、海岸懸相心得罷在候に付、海防手當は勿論、蠻國の事情に通じ、主人の輔翼に相成度き心底を以て、高野長英等と交はり、蘭學を學び、去年參向のカピタン、ライマンより説話等傳聞し、井蛙鵠鶴、盲瞽想象等の譬を取り、其他畏れ多き事共を相認め御政事を批判致し候段、畢竟海岸お手當等薄くては、不慮の儀有之節、國家の爲に相成ざる儀と、一途に存じ過し候心底を以て、自問自答の心得にて、右の通り認め置候へ共、右の始末は公儀を憚らず不敬の至り、重役相勤め候身分、別して不届に付、主人家來へ引渡し、在所に於て蟄居申付く」とある、様に、被告に充分

同情してゐると、見せかけてある蔭から、當局自身の辯疏の方が、先に立って見え透いてゐた。

此犠牲に上げられたのが密告者の虎一で、天晴賞を受ける積りだった彼は、淨説を流布した者として、却って牢舎を命ぜられた。人を呪は、穴二つだった。

田原に歸つた華山の生活は、實に慘ましいものであつた。心を知る者は皆其冤を歎いたが、藩の重役は孰れも華山の敵だった。

微祿から身を興して、藩政に參與し、識見を恃んで、我意を貫いた。——といふ嫉みが、長い間の鬱屈から伸上つて、一時に華山の身邊へ迫つた。——それには別に大きな原因もあつた。

一三

當主土佐守は、實は三宅氏の血統でなく、播州姫路の城主酒井雅樂頭の弟が入つて養子になつたのだつた。

小藩の田原は、それでなくても裕福でない處へ、近年海防其他の費用が嵩んで、國用甚だ窮乏を告げてゐたので、先代友信には庶腹の子が二人迄あつたけれど、重役等の勧めに隨ひ、大藩から嗣子を迎へて、國歩の艱難を救はうとした、華山は當時はまだ微祿であつたから、何等容喙する資格がなかつたけれど、先君逝去の後に及んで、再び此問題が持上つた時、華山は面を犯して當主を諫めた。土佐守の心では、無論自分の子を以て、跡目を嗣がせる積りだった。

「畏れながら殿、御聰明に渡らせらるれば、今更申上ぐるには及びませぬ事ながら、御當家三宅の御本姓は、遠く兒島高德朝臣に發して、代々其お血統を絶たざる、由緒あるお家柄にムりまする、先殿様お部屋腹とは申しながら、若殿お二人迄おありなされながら、殿に御家督をお譲り遊ばしたのは、一旦のお約束を重んじさせられたからと存じまする、さすれば殿に於かせられても、這回お世嗣をお定め遊ばすに就ては、先づ其お血統の方からお擧げなさる、が、亡き先殿様への

御孝養、また物の順理かと、憚りながら存じ上げ奉りまする、若し一旦の御愛情の爲に、殿御謙讓の美德を損はせらる、様の事ありては、第一殿のお爲、またお家のお爲にも、此上ない遺憾の次第と存じますれば、何卒此義御賢察の下されまして、今一應御思案の程、偏に願ひ上げ奉りまする、御前體をも憚らず、斯様の事申上げまする私奴の無禮は、假令お手討になりませうとも、さらしくお怨みとは存じませぬ、慇懃を盡した言葉の裡に、冒し難い決心と、主家を思ふ真心とは溢れてゐた。

「よく申して呉れた、全くこれは予が過失であつた、早速改めるであらうぞ」と、土佐守は即座に華山の諫めを容れて、他の重役とも協議の上、血統の繋がる甥を以て、更めて家督と定めたが、財政の困難に對しては、孰れも顔を見合せた。乃で華山は率先して、自ら俸祿の半額を上納し、藩中一般にも之を勸めて、國費の不足を補ふの案を立てた。何事も主君の爲といふ、忠義の二字の前には、何

人も争ふ事は能ないので、溢々承知はしたけれど、心の中では無論不満に思つた者も尠くなかつた。

「渡邊の奴、自分は書を沽つて家が裕かだから、何の苦痛もなからうけれど、俺達はさうでない、お扶持ばかりで暮してゐる者が、他の忠義のお接伴をさせられずは、全く遣切れたものでない」と陰へ廻つては慥慶事を、口に出していふ者さへあつた。

其華山が失脚して、郷里に蟄居を命ぜられたのだ。

一四

同情者はあつても、藩政を掌る権力は、反對者の方に多かつた。

華山の幕府に獲た罪は、これ等の人々に依つて、更に輪をかけて傳へられ、歸藩と同時に、従前の俸祿は悉く召上られ、僅かに喰扶持だけを給せらるゝに過ぎなかつた。併し謹嚴な華山は、世をも人をも、毫しも怨む色はなく、「とりつみ

て世を炭がまの煙たきは、己が焚きそふ薪なりけり」と詠んで、自ら耕し、母や妻は紡績をして、活計の資を輔けてゐた。江戸にある門下の人々が、此境遇に同情して、毎月二歩宛の金を醸出し、遙かに之を貢いで、幽居の師を慰めた。

華山は其志を喜んで、屢々書を描て禮心に送つた。

數多ある門下の中にも、福田半香、椿椿山、山本葉谷、井上竹逸の四人は最も著はれて、華山門下の四天王と稱せられた。

華山は曾て之等の門下に對し、「我國に傳はる漢人の畫に、兎角眞蹟は少いが俺の今迄見た中で云ふと、雲煙は王石谷が第一、花卉は先づ南田暉であらう、而して、半香は雲煙、椿山は花卉に長じて居る、人には各々得意があるから、其方に向つて進む事が肝要だ」と云つた。蘭學を學んだ華山は、西洋の畫風をも取入れて、自ら肖像を描いた事もあつて、餘財があれば書畫を集めて、研究の資に充たから、自然と鑑識にも長じて、如何なる古書畫も一目見れば、直ちに其眞實を判

じた。

集めた書畫は數百點、それは華山の全財産であつたが、彼はまた曾て此全財産を擧げて、悉く藩侯に献上した。友人が驚いて、貴公多年心を用ひて、漸くあれだけに蒐めたものを、むざむざと献上してしまつて、惜いとは思はぬかといふと、華山は呵々と笑つて、「如何にも惜い、惜いから殿に献上したのだ、家に藏して置いても、子孫が若し其尙ぶべきを知らず、粗略に扱ふて散逸させたり、蠶魚に喰はせてしまふ様な事があつては、折角の丹精も無益になる、若しまた子孫の内に尙ぶべきを知るものがあつたら、俺の様にまた蒐めるであらうよ」と答へた。

生れついて體格偉大、音吐鐘の如く、裾短の袴に、長刀を横へて、大道を闊歩する時は、武藝者と誤られた程の華山も、半歳の牢舎と、引續いての幽愁に、さしも豊だつた頬も殺け、疎の髻が蓬々と伸びると、天成の長面が、さながら瘦た馬の如く、慘々しく窶れ果た身に、又しても苛責の鞭は加へられた。門人に送つ

た書や、知友と交した消息が、いつか幕府へ聞えると、幽囚の身を以て、妄に書翰の往復をするは不届至極、それを放任して置くは、主人たるもの、懈怠であらうと、在國の殿に譴責が下った。

一五

「登は何うしました、今日はまだ一度も顔を見せぬではありませぬか」。華山の母は嫁を顧みて恚う云った。「何か書物をしてゐました様で△いますが、一寸見て参りませう」。妻女は何の氣もなく答へて、二階の部屋へ上つて往た。

華山に對する反對派の迫害は、其前からも屢行はれた。或者は當時恰も幕府の要路に、數名の改革が行はれたのを聞くと、直ちに殿の前へ出て「這回公儀役人の變改は、皆異國の事に關係して、御不興を蒙つた者の由に△りまする。されば殿に於せられても、此際篤と御思案が肝要かと存じまする」と言上した。いふ迄もなく華山に對して、斷然たる處置を執れとの意味であつた。

華山はこれを知ると、早速江戸の半香の許へ、實否を確かめる事を頼んでやつたが、其書面の返事はまだ着かなかつた。

公儀から殿に對する譴責の狀が届いたと聞いた時、華山は母の許に呼ばれて、「其方の志はよう知つてゐますけれど、それが爲殿様に迄、御迷惑をお懸け申す様な事があつては濟みませぬ、この道理をよう考へて、其方も覺悟をせねばなりませんまい」と説かれた。華山の母は男勝りの、氣丈な賢婦人であつた。

其日から一室に籠つて、親戚朋友へ澤山の手紙を書いてゐた華山は、更に紙を舒べて邯鄲廬生の夢の圖を描いた、それが昨日の事だつた。

「母様、大變で△ります、所天は自害をして相果しました」と、遺がに愼み深い妻女も、色を變へて息を亢ませてゐた。「ナニ登が自害をしましたと、さもあるべき筈、驚くには當りませぬ、而て最う萍は絶れましたか」、「はい、あの美事に喉を突きまして」、「はて、喉を突いたとは以ての外、それでは女子の自害といふも

の、武士らしく何故腹を切っては呉れなんだか」と眉を擡めて、我子の死を聞いても老母は毫も騒がなかつた。「兎も角も、最期を見てやりませう」と、嫁と孫とに扶けられて、靜かに階段を上つて往た。

部屋の中には、韓紅の漂ふ海に、端然と坐つた儘、切尖は頸迄貫いて、ヒタと俯伏した華山の姿が、痛ましく人々の目を射たが、石の如く動かぬ遺骸に、取亂した状は見えなかつた。

筐となつた「廬生の夢」の傍らには、別に「不忠不孝渡邊登」の七字を大書した書箋が残つてゐた。

老母はやをら死骸を引起して、身體の創を檢めると、果して華山は、最初に腹を掻切つて後、白布を以て緊乎と創口を縛り、更に衣紋を改めて、それから喉を貫いたのだつた。

此體を見届けると、老母は初めて淋しい笑を浮べながら、「登はやはり我子であ

つた」と、兩眼を連睨いた。——天保十二年(七十八年前)十月十一日、享年四十九であつた。

一六

半香からの返書に依ると、幕府の改革は必ずしも、外事に關するの故ではなかつた。随つて藩主への譴責といふのも、其間には怎麼綾があつたかも知れなかつた。併し其返書の着いた時は、華山は最う現世の人ではなかつた。

我子に残した遺書には、假令餓死ぬとも、二君にばし仕へやうと思ふ勿、何卒祖母を大切にして呉れ、お前の母は薄倖な人であるから、必ず孝行を盡さねばならぬが、お前の父は罪人である、決して墓碑を建て、はならぬ、とあつた。

二子譜、小華と號して父の業を繼ぎ、明治年間迄存へた。

是より先、其年四月三日の夜、長英の繫がれてゐる傳馬町の牢から火を出して囚人全部、取敢ず一時開放された。

足掛三年の禁獄の間に、長英はいッか牢名主に推されてゐたから、牢拂ひの節には同房の一同に、錠の通り必ず三日以内に歸る事を説諭して、自分も退散した。垢付いた獄衣に、髪も髻も蓬々と伸びた偉漢が、其夜松永町の蘭醫大槻俊齋の門を叩いた。恠む門人を大喝して、強て主人に面會を求めるので、俊齋は何者が来たかと、自ら女關へ出て見た。

「故人高野長英ちや、此姿にはなつたれど、まだ見忘れはされぬ筈ぢや」、「お、高野氏か、これは珍しい、先づく」と、俊齋は快く奥へ通した。同じ伊達家の祿を喰んだ、白石の元片倉家の家來で、シーボルトの塾でも同窓に學んだ、少年時代からの舊友だつた。

長英は茲で、衣類脇差を乞受け、剃刀を借りて髻月代を剃つた上、更に伊東玄朴、竹内玄洞等、やはり長崎時代の同窓で、江戸に開業してゐる諸友を訪ね、金錢衣服の合力を求めて、立派に醫者の身装を拵へ、それきり姿を匿してしまつた。

無論牢拂ひの期限は切れても、再び傳馬町へは歸らなかつた。

忽ち人相書は四方へ配布されて、嚴しい詮議が始まつた。——長英がまだ牢屋にゐる頃、新入の未決囚で、榮藏といふ町人があつた。名主の長英は、これに目をかけてやり、種々と無罪になる様な、辯疏の仕方を教へてやつたので、榮藏は之れを徳として、若し娑婆を見る時節が來たら、必ず先生をお救ひ申しますと、約束をした事があつた。果してそれが無罪になつたので、放免後間もなく起つた火事は、屹度榮藏の所業に違いないといふ評判が傳へられた爲め、長英に對する其筋の憎しみは一層深かつた。

郷里水澤へは、特に隠密が入込んで、嚴しく出入を監視したので、母や妻子に逢ひ度くても、近づく事すら能なかつた。

斯くて一年餘りの間、長英は却つてお膝元の江戸に潜んでゐた。

天保十三年の冬、稍詮議の弛んだと見た長英は、劇薬硝石精を以て、我と我が半面を焼き、容貌を變へて郷里水澤へ赴き、久し振に母にも對面して、重なる不孝の罪を詫た。

折柄の雪は忽ち、其足跡を降埋めて、幸ひ人目には懸らなかつたが、固より長く留まるべきではないから、直ぐに又雪の中を引返して江戸に出で、更に轉じて名古屋へ落ちたが、こゝでも露はれさうになつたので、遠く走つて伊豫へ逃れた。宇和島の藩主は伊達家の一門、其縁を頼つて往つたのだつた。

海山二百餘里を隔て、追がに幕府の目も、そこ迄は届かなかつたか、藩主伊達侯は長英の才を愛し、擢んで、其譯官に擧げられたので、初めて聊かの寧處を得た長英は、竊かに俸祿の中を割いて、遙々妻子の許へ送つてゐた。

居る事三年、江戸の朋友から密書が届いて、閣老水野越前守も失脚し、餘程は

冷めたとあつたので、長英は喜んで再び江戸に歸り、姓名も高柳柳之輔と改めて取敢ず鈴木春山に頼つた。

春山の知人松下壽醉、閣老水野忠精の家來だつたが、大砲鑄造に名を得てゐたので、春山が紹介して長英の柳之輔と交はらせた。壽醉は柳之輔の卓識に服して其子健作を弟子入させ、専ら火薬の製法と、火器運用の術とを學ばしめた。長英はまた志を盡して、悉く濫奥を授けたので、壽醉は大いに喜んで、いつか其素性をも、お尋ね者の長英とは知つたけれど、却つて之を庇護ふ事に努めて、機もあつたら救ひ度いと、同志の横井宗也に謀つた。宗也は早速長英を伴ふて、幕府の軍務士官勝麟太郎の邸を訪れた。

麟太郎は後の安房守、當時はまだ二十歳の青年であつたが、宗也の懇請を聽了ると、沈思稍少時の後、容を改めて、「お頼みはよく相解つた、また其事情をお氣の毒とは存するが、併し我等は、不肖ながら公儀の御扶持を頂戴く者、高野氏

は其罪人ぢや、拙者の手に依つて高野氏を匿ふ事は、義に於て能申さぬ處ぢや、なれども私の交りとしては、高野氏と拙者と、何の恩も怨みもムらぬ、依て必ず他人には語り申すまい、それだけは御安心あつて、再び我等邸へは、お越し下さらぬ様に願ひ度いと、理義を盡して決然と断つた。

若年ながら立派な言葉に、長英も感心して、「いや、これは手前の誤りでムツた、重ねて御迷惑はお懸け申すまい」。云ひながら懐中から取出した外書一冊、「扱、此なる書籍は、手前斯く讀古したものながら、いつかは斯様な事もあつたと、今日お訪ね申した記念として、何卒お留め置を願はしう存する」と、一禮述べて暇を告げた。それは長英が手づから點竄批評した兵書で、後迄勝家に珍藏された。長英は更に世を忍ぶ名を、澤三伯と改めた。

一八

伊東玄朴は當時蘭醫として最も名望があつた。一日薩摩屋敷へ伺候すると、早

速殿の御前へ召された、殿は有名な齊彬公であつた。

「玄朴よく見えた、予は近頃良書を手に入れたが、其方には勝手違ひかも知らぬけれど、元はやはり蘭書ぢやから、一度見せ度いと思ふてゐた處ぢや」、「左様でムりまするか、如何なる書物かは存じませぬが、是非拜見をお願い申し度いもので」、「お、これなる寫本ぢや、三兵操練の蘭書を譯させたものぢやが、文もよく義も明かに、尋常一様の譯書の類でないぞ」、「先づ拜見仕りまする」。玄朴は肅かに二三丁黙讀して往つたが、急に顔を上げると、驚きの目を睜つてゐた。

「何うぢや、巧なものであらう」、「思ひも懸ざる良書、何者より差上りましたか」、「青山とかに住居致す、澤三伯と申す蘭學者ぢやさうな、斯程の博學が、民間に隠れて居るとは、珍しい事でないか」、「澤三伯とは、ついぞ承はつた事もムりませぬが、殿には高野長英を御存知ムりませぬか」、「それは何人であるか」、「手前同窓の者にムりまするが、故あつて世の交り避けて居りまする、併し學問、

見識拔群の者にムりまして、醫術は勿論、政治經濟、兵學に至ります迄、方今の蘭學者として、彼の右に出る者はムりませぬ、只今これを拜見致しまするに、文章と申し理義と申し、蘭書を譯して斯程迄、精確を期し得る者、恐らく長英を除いて、他にはあるまいと存じまする、「ほう、其方が左程迄に申する人物ならば、予も逢ひ度いと思ふが、而て其長英とやらの住居を存じて居るか」、「いえ、只今も申し上げる如く、故あつて世に隠れ居りますれば、數年音信とても聞きませぬが、若し其三伯とやらが、果して長英でムりますならば、近頃再び御府内へ立歸つた者かと存じまする」、「住居が知れぬとは残念な事ぢやの、若し其中にも心當りがあつたら、早速知らして呉れるやう」、「畏まりましたムりまする」。立林は其儘退出したが、いくら名君でも、そこは追がに大名であつた。齊彬公は翌日柳營へ登城すると、左右を顧みて、早速其談をした。而して人の顔さへ見ると、「其許高野長英を御存じないか、我等も一度會ひ度いと存じて居るが、住所

が知れぬ爲當惑致す、若しお聞込になつたらお知せを願ひ度い」と、大々名の島津侯が、自ら慙う云つて尋ねるのであるから、忽ち柳營中の評判になつて、無論幕府の役人の耳にも入つた。時代は移つても罪は消えぬ、傳馬町破獄の大罪人が、依然府内に潜んでゐると判ると、一時弛んでゐた詮議の手は、再び又嚴しくなつた。

一九

弘化から嘉永へかけて五年餘り、長英は江戸に潜んで、専ら翻譯に従事した。弘化三年、米艦が初めて浦賀へ來て以來、世上は益々騒がしく、西洋の兵式を研究する者が殖えたので、長英は盛んに兵書を譯述して梓に上し、殊に砲術の書が珍重されて、それが生活の資となつてゐた。

郷里から妻子をも呼迎へて同棲し、妻に對しては、お赦になつて牢は出たのだが、煩い世間と交はる事が厭だから、故と容を斷つて、名前も變へてゐるのだと

言ひ拵へてゐるが、容子で早くもさうでない事は判ったけれど、貞淑な妻女は、決してそれを訊かうとはしなかつた。

再び詮議が厳しくなつた事を聞いて、川路左衛門尉杯は、罪の起りが全く讒者の構造に依る事を知つてゐるから、百方庇護に努めたけれど、破獄の一點に至ると、遂に力が及ばなかつた。

自分ではまだ、何事も知らなかつた長英は、患者の診察を頼まれて、松下壽醉の別荘へ往つた處を、遂う探索の爲に發見された。

「彼に違へねえと思ふんだが、若し人間違へでもあつちや詰らねえ、それにへマを行つて、逃げられでもした日にや何にもならねえから、俺はこゝに張込んで歸りを待つて尾けてやらう、お前旦那衆の許へ往つて、此事を知らせて来て呉れ。」
 慙うして探索の手配りは出來た。

月番の町方に、偶々傳馬町で、長英と同じ牢にゐた囚人の、再び罪を犯して、

捕はれて來たのがあつた。

「何うだ、神妙に御様を勤めるなら、手前の罪は宥してやるが、高野長英の見知人にならねえか」、「え、罪さへお宥し下さるなら、心願事でもやりますよ」、「さうか、ぢや黙つて俺に跟いて來い」。

長英の青山の住居は、忽ち彼等に突留められた。

「へえ、御免下さいまし」、「誰だ汝は」、「先生にお目に懸り度えんで、傳馬町にゐました時分、種々お世話になつた者だと云つて下さりや、先生にはお解りになる筈です」。

長英は何の氣もなく出て見ると、笠に面を隠してゐるのが、四邊に氣を配りながら、初めてそつと脱棄た。「先生お久しうムいます」、「お、何うして俺のこゝにゐる事が解つた」、「へえ、それは張矢蛇の道で、いえナニ、先刻お歸りの處を一寸お見掛け申したんで」、「さうか、何しに來た」、「實は誠に相濟まねえんです

が、また些と忙しい軀になつて、上方の方へでも高飛しなけれあならねえんで、ホンの草鞋錢だけでも、お願へ申し度えと思ひましてね、「ふウむ、まだ悪事が止まぬか、仕様のない奴だな」。

長英は苦笑ひしながら、若干かの金子を紙に包んでやツた。其男は先を急ぐからと云ツて、挨拶もそこくんに駆出した。

二〇

「はてな」。長英は晩酌の盃を舉げながら、偶と耳を欬てた。

「何うかなされましたか」と、銚子を持った妻女が、思はず立窺らうとするのを、目で制しながら、黙ツてグツと飲干した。

漸く暮れたばかりだが、山の手の夜は寂然として、颯と木枯しの過ぎた後は、虫の這ふ音も聞える程の静かさになツた。

「空耳であツたか」。再び湛々と受けた時、中庭の方に當ツて、がさり／＼と落葉

を踏む躑音が聞えた。風の音にも心を置く身は、豫て住宅の警めを怠らず、庭には一面に木の葉を敷詰めて、僅かに一條の細徑を開けて置くだけだツた。其敷詰めた落葉が、がさり／＼と鳴ツた。

長英は身纏ひして、急に立上ツた。妻女を別室へ去らせて、フツと燈を吹消すと、闇を搜ツて、雨戸をそつと一枚開けた。木枯しがまた一しきり吹込んで、途端にバラ／＼と時雨が来た。戸外も如法の闇だツた。

最一度帯を締直して、竊かに中庭へ降立つと、突然左右から、「御用だ」、「御用だ」と組付いた、聲と同時にばら／＼と飛出した。表から二人、床下から三人、中庭に潜んでゐた二人を合せると、都合捕吏は七人だツた。

「神妙にしろ」、「えい」、「やツ」。どたく、ばたく、一團になつて組むかと思はると、解れてバツと散る間に、長英の抜いた脇差が、星明りにキラリときらめいた。時雨の雲も慌だしい。

「えい、抵抗するかつ」、「抜いたぞツ」といふ口の下から、わツと唸いて、前後に倒れた。一人は脇腹を刺され、一人は肩先を斬られたのだ。「やア、やア」と残る五人が固圍を取巻いた。

長英は油断なく身構へして、屹度四方を睨んだが、うむと點頭くと、「天命ぢや、高野長英の最期を見て置けツ」。切尖を返すと見ると、攪と坐して、かつぱと俯した。「それツ」と一度に立鬼ツて、難なく繩をかけて見ると、長英は美事に頸動脈を斷ツて、最早粹切れた後だツた。——嘉永三年(六十九年前)十月晦日の夜、年四十七だツた。

妻及び四人の子は、其場から引擧られ、松下壽醉、健作父子、其他長英と知ツて交ツた者は、悉くお手當になツた。長英が片腕と頼んだ春山は、これより先弘化三年、病を獲て憤死した後だツた。吟味の末、妻女は蟄居、四人の子は家財と共に、妻女の弟に預けられ、壽醉

親子は遠島に處せられた。醫術から蘭學に入ツて、當代無二と稱せられた長英はまた和漢の文にも長けて其傳馬町に入牢中「鳥の啼く音」と題した自記は、此和漢洋を兼た學者の面影を、俣ばしむるに足る名文だツた。努めて政治經濟を論じ、醫術の如きは自ら稱して、餘技としてゐたものながら、尙遙かに時流を抽んで、一世の推重する處であツた事は、恰も華山の畫に於けると同じであツた。(此項終)

俳諧寺一茶

柏原の名主嘉右衛門が、いそぐとして俳諧寺を訪れた。

「彌太郎殿お宅にか、やれまア何をしてムラッしやるね」、「これは名主殿か、結構なお天氣で、暖かい事ぢやな」と、一茶は日當りの軒端近く、古布子を擴げて餘念もなく縫目を涉ッてゐた。

「暖かいのは解ッて居るが、此方まア何といふ装をしてムるだ」、「は、は、古布子に虱が集ッたで、今放生會をしでるる處ぢや、裸でゐてはまだ寒いから、一寸着替に襦袢を引張出したのさ」、「あは、は、相變らず此方のする事は變ッて居るな、土用の炎天に綿入を着てムるかと思ふと、寒中襦袢に包まって、日南ぼっこをしてゐるぢや抔と、よく噂には聞いてゐるが、而して一體、放生會とは何の供養ぢやな」、「何でもなし虱の爲ぢや、生あるものを捻り潰すも可哀さう、さりとして、らへ棄て置ては、斷食の爲に死ぬであらう、乃でこれ、柘榴の木へ這はせてやるのぢや」、「はてな、虱の餌食に柘榴とは」、「明惠寺の説教でも聴きなさらぬか、人の子を喰ふ鬼の母に、お釋迦様が授けられたとやら、人間の味がするといふ此

柘榴、鬼子母神の由來から思ひついたのぢや、我味の柘榴に這はす虱哉、それそれ行列を作ッて登るわ〜」

嘉右衛門は暫し呆れて、開いた口が塞がらなかつたが、「いや、それ處ではない、大切な御用があッて來たのぢや、直にこれから俺と一緒に、本陣迄來て下され」、「御用とは何ぢやな」、「はて大切な御用ぢや、加賀様參觀の御途次、當宿へお泊りなされて、此方の風流をお聞きなされ、是非其發句を見度いとあッて、目通り仰付けられたのぢや、何と有難い事ではないか」。一茶は鼻の先で冷笑しながら、「折角ぢやが、御免蒙らう」、「あれまア、何を云ッしやる」、「風流に御用はない、また面目にする俳諧でもムらぬわ、宇宙萬物、さうした御用で俗化されてしまふのが、俺は大嫌ひなのぢや」。

きよとんとしてゐた嘉右衛門は、瞞すに手なしと、「いや、これは俺が悪かつた、御用と云ッたは、ついついもの口癖が出たので、加賀様からは入懇のお招きぢや、

態々俺の許へお使ひを下されて、表立ッてのお使者では、却ッて此方が迷惑であらう、何卒俺からさう云ッて、懇に同道して呉れどのお頼みぢや、此方の氣心はよう知ッてるながら、つい彼塵事を云ッたのは、重々俺のあやまりぢや、それが爲若しも此方が来て下さらぬと、俺は腹切仕事ぢやから、何卒さう云はずに機嫌を直して、一寸でも顔を出して下され、
「あは、腹切仕事はよく出来た、併しそれ程迄にお前様を困らせては氣の毒ぢや、念晴しに同道しませうよ、
「やれ有難い、それで漸う落着いた、併し衣服は改めぬ、尤も改める衣服もないが、此古布子で可からうの、嘉右衛門は澁々承知するより外なかつた。

二

虱狩を半途で止した古布子を、ばツと二三度振ッた儘、直に引懸て出蒐けやうとする一茶の袖を、嘉右衛門は一寸控へて、「最一つ俺の願ひぢやが、何と云ッても先は百萬石の加賀様ぢや、此方も例もの氣象を止めて、少しは御氣嫌取りに、

體の好いお世辭でも云ふ様にして貰へまいか、
「あは、これはまた異なお頼みぢやな、併し外ならぬ名主殿の事ぢや、思ひきッてやりませうよ、
「有難い、いつも其様に素直に云ッて下さると、此方も好いお人ぢやがなア、
「は、お前様もまた、いつも其様に腰が低いと、好い名主殿ぢやがなア。

一茶は皮肉に笑ひながら、敝衣垢面、尙儂で跛の醜い姿を恥る色もなく、平然として嘉右衛門と一緒に歩んだ。

柏原の本陣には、梅鉢の紋打ッた幕を張渡し、盛砂に打水、高張提灯、儀容堂堂として、百萬石の威を示してゐたが、前田侯は案外打寛いだ體で、一茶を引見した。嘉右衛門は無論御前へは出られなかつた。

「其方が一茶か、よう參ッた、豫て風流の名は聞いてゐたが、俳味とは怎麼事ぢやの、一茶は畏る、氣色もなく、膝を進めて、
「俳諧の道は孔釋の道と同じで、今の俳諧をいふものは、唯だ題を得て發句を作るだけの事、共に談ずるには足り

ませぬ、「左様か、而て汝の俳諧は何うぢやの」、「山水風月、皆これ俳家生涯の事ことでゐる、心の赴おもむく儘ままに發はつするのが、即ち自然しぜんの俳諧はいかいで△△て、巧たくまぬものこそ最も俳味はいみは濃こまかで△△う、尸位しゐ素餐そさんの輩ともに、眞まことの俳諧はいかいが解わからう道理だうりは△△りませぬ」と、傍若無人ぼうじやくぶじんの放言ほうげんに、席せきに在ある者ものは色いろを變かへたが、侯こうは却かへつて莞爾にこやかに、「齒はに衣着きやくせずよく申まをした、聞きしに違たがはぬ其方そちの器量かりやう、予よは其意氣そのいきが氣きに入いつたぞ」、「あは、恐れ入おそりまする」、「これ、一茶いっさに膳部ぜんぶを取とらせよ」、「はッ」。

やがて運はこばれた膳部ぜんぶに對たいしても、一茶いっさは何なんの遠慮えんりよもなく、心こころの儘ままに酒さけを飲のみ、肴さかなを荒あらした、次ついでで引出物ひきだとして、時服じふく二領にりやうを下くだされた。一茶いっさは一寸考ちよつとかんがへてゐたが、和にやりと笑わらつて、「有難ありがたく頂戴ちやうだい仕つかまつりまする、ではこれでお暇いとまを」、「左様か、大義たいぎであつたの」。

一茶いっさは御前ごぜんを下くだらうとして、何故なぜか偶ふと躊躇ちゆうちよした、「何なにうぞ致いたしたか」、「いや、飛とんだ事ことを失念しつねん致いたしました、高貴かうきの御前ごぜんへ出でたら、必ず追従つゐしやうを申まをす様やうにと、折角せつかく

名主なぬしに頼たのまれて參まをつたのに、頓とんと忘れて居をりました、改あらためてお世辭せしごを申まを上げます」と、一茶いっさは眞面目まじめに、額ひたひの汗あせを拭ふきながら低頭ていとうした。

「は、、面白おもしろい事ことを事まをす、其罰そのばつとして一句吟くまぬか」。

子供こども迄までのんのうと呼よぶ梅うめの花はな

一茶いっさとしては珍めづしく、如才ぢよさいのない句くであつた。

三

上首尾じやうしゆびで本陣ほんじんを出でた一茶いっさは、拜領はいりやうの衣服いふくを抱かかへて、別べつに嬉うれしい顔かほもせず、例れいの怪あやしい歩調あしぢりで、飄々へうくと菴室あんしつへ立歸たちかへつた。

菴室あんしつには噂うはさを聞きいて集あつつてゐた門人もんじんが、姿すがたを見ると飛とんで出でて迎むかへた。

「お歸かへりなされませ、御前ごぜんの首尾しゆびは如何いかで△△りました」、「首尾しゆびは別べつに何なんともない、

「お、拜領物はいりやうもので△△りますか、さ、私わたしがお持もち申まをさせう」、「いや、それには及およばぬ」。一茶いっさは何なんと思おもつたか、直すぐには家うちへ入はいらず、ぐるりと廻まをつて肴戸せどへ出でる

と、抱へてゐた衣服を包の儘、崖なりになつてゐる下の田圃へ、惜氣もなく投棄した。

「やれまア、何をなさるのでムリです」、「用もない衣服を棄てたのぢや」、「でも折角加賀様から下されたものを」、「は、は、は、それだから棄てたのぢや、一體貰つて來るといふ事が厭なのぢやが、貴人の前で辭退すると、あれ見よ一茶は、内心では欲しがつてゐる癖に、故と無慾を銜ふのぢやと、世上の口が煩いから、暫らく假に取けた迄ぢや、慙うしてしまへば先でも氣が濟む、俺も安心ぢや、さア家へ入つて、澁茶でも飲みなされ」と先に立つて引返しなから、振向いても見なかつた。

菴に入ると早速硯を引寄せて、ベツ、ベツと唾液で墨を磨りながら、塵紙の黥を伸し、秃筆を嚙んで、

何のその百萬石は笹の露

と書いて見せた。門人は顔を見合せた。

一茶は北信黒姫山の麓に近く、芙蓉湖に臨んだ山水の勝地、上水内郡柏原在の百姓、彌五兵衛の長男と生れて、通稱を彌太郎と云つた。まだ物心もつかぬ頃生の母に別れて、邪慳な繼母の手に育てられた。「親のない子は何處でも知れる、爪を啜へて門に立つ」と、朋輩の惡太郎共に誣はれて、遊びの仲間にも入れて貰はず、いつも一人ぼっちで、裏の畑に木登杯積んだ片蔭に、不具の身をくゞまつて、長い日を暮した追憶を、「我身ながら哀れなりけり」と、後の文章にも認めてある。

我と來て遊べや親のない雀

とは僅か六歳の彌太郎が、子供心に坐ろ口吟んだ、初めての句であつた。七八つの頃から中村利爲の郷塾に入つて、讀書の傍には俳諧を學んだ。利爲は通稱六左衛門、俳名を新甫と號して、先代利信が加州の藩士藤田某に俳諧を學んだ其餘流を汲んでゐたので、彌太郎に俳才のあるのを見て、手ほどきに教へてやつ

たのだった。

家が貧乏で、筆紙を求め資も與へられず、百姓の子に文字は要ぬと、嘯つく様に我鳴られながら、圍爐裏の灰を掻ならして手習をし、不自由な身に晝は田畑の仕事を助け、夜に入つて皆の寢静まつて後、窃と起ては書物を讀んだ。それさへ繼母に發見されると、餘計な油を使ふとて、打叩かれる事も珍しくなかつた。

四

利爲が歿つて後、一茶は更に堀徳輝の門に入つた。

徳輝は肥前大村の浪人で、長月庵若翁と號し、經典に通じ、老莊の學を極め、俳諧は正風の流か汲んで、芭蕉の桃青の一字を襲ひ、別に俳名を桃園と云つた。終に柏原の土になつた人で、姥捨山の觀月堂に「姥捨や姥がゆかりの尼一人」の句が残つてゐる。

一茶は其門人となつて、専ら俳句を學んだが、それが爲益々繼母に疎まれて、

遂う十四の歳に家を逐出された。それから二年ばかりの間は、若翁の許に内弟子として、厄介になつてゐたが、十六の歳に、初めてトボくと江戸へ出た。

固より學資もなければ、知識もない、漸く若翁の添書に依つて、某儒者の家の下僕になつたり、或ひは聖堂の小使を勤めて、用務の忙しい間にも、竊に講義を立聽して、具に苦學の辛酸を嘗めた。

其日庵素丸は葛飾派の家元で、當時有名な宗匠であつた。天明末の八月、向島の其草庵で、觀月の句が催された。一茶は初めて那庵席に列つて、隅の方に小くなつてゐた。

醜い姿、穢い装、見識らぬ一座の俳人は、それだけで最う輕侮の眼に見下した。

「ついで見懸けない人だが、お前さんも句を吟みなさるか」、「ほんの眞似事ばかりで」と、一茶はまだ謙遜してゐた。「ほう、それは感心な事だ、何うだな、此名月に對して何か出來たら、一つ見せて貰ひ度いものだな」、「一向の初心で、お

目に懸る様なものは出来ませぬが、お笑ひ草に一句吟んで見ませう、
所望だ〜」。

一茶は別に考へもせず、筆を取ると手近にあつた短冊へ、いきなり「三日月の」と書いた。

「何と出来たなく〜」、「はてな、三日月の、とはこりや何うだ」、「あは、、、
三日月は可笑い、三五夜中の名月ではないか」、「成程初心に達しない」、「お笑ひ
草はよく出来た、あは、、、お月様も笑つてゐるわ」、「は、、、」。

耳にもかけず、一茶はさら〜と筆を運んだ。
「ナニ、一寸お待ちなさい、え、と、頃より待ちし、ふウむ、些とお静かに願ひ度
い、頃より待ちし今宵かな、成程」、「何と、最一度一息にお讀上を願ひ度い」。

三日月の頃より待ちし今宵哉
呀と一座は聲を呑んだ、句としての善悪よりも、當意即妙の機智に撲たれたの

だ。

宗匠の素丸が感心して、即座に門弟の數に加へ、二六菴菊明の名を與へた。そ
れは一茶が二十六の歳だつた。越て寛政二年四月七日、二十八歳で點者に進み、
其派で由緒ある竹阿の名跡を襲だ。

五

寛政六年、三十二で郷里柏原へ歸り、妻を娶つて女の子を儲けた。

家は繼母の腹に生れた弟が嗣いでゐたので、自分は別に所帯を持つたが、依
然として郷里の生活は、彼に取て楽しいものでなかつた。貧しい實家の、僅かな
財産に對しても、兄と生れた一茶と弟との間には、不愉快な反目や葛藤があつ
た。醜い不具者を承知で嫁いだ妻女も、偏執で陰氣な、神經過敏の所天に對して、
同情者たり慰藉者たるには、平凡な只の婦人であつた。

一茶の風流三昧は、其門々の情を宥める、唯一つの遺瀨であつたのだ。氣の向

いた方へ遊び歩いて、殆んど家事を顧みず、炎天の布子、冬の蚊帳、床の間に便器を備へて置いたり、坐つた儘小便を垂流して、平氣で始末をさせる様な、狂氣染た眞似をしたのも源の發する處は皆一つであつた。

享和元年に、ぶらりとまた江戸へ出た。先に引立て呉れた素丸は既に歿して、門人の白芹が其跡を襲ぎ、其日庵を名乗つてゐたので、一茶は故とそこへは行かずに、藏前の札差で、井筒屋八右衛門と云つた、夏目成美の許を訪ねた。

「信州の竹阿と申すものぢやが、御主人御在宅なら、お目に懸り度い」。店にゐた番頭が、装を見て眉を擧めながら、「怎麼御用ですかい」と無愛想な挨拶をした。

「別に用事といふではムらぬが、風流の道に遊ぶ者、御高名を慕ふてお訪ね申したのぢや」、「さうですかい、それは折角でしたが、生憎主人は、此頃病氣で寢んでますから、逆もお目には懸りますまい」、「ほう、御病氣でお目に懸れぬ、それは残念ぢやが、致し方がない、重ねてお訪ねもなるまいから、寔に申し兼まし

たが、一寸料紙と筆とを拜借願ひ度い」、「何になさいますか」と、遊々硯箱を持出させた。「何有、唯だお訪ね申した印に、一句残して行き度いと思ひましてな、後で御主人のお目に懸けて頂戴き度い」。

信濃では月と佛とおらが蕎麥
「飛んだお邪魔をしました」と、其儘暇を告げて、すたくと御厩橋の方へ歩いた。

「若しそこへお出でのお方、一寸お待ちなすつて下さい」、「呼ばれたのは、俺の事か喃」、「へい、あなたが信州のお客様でしたな」、「信州の乞食坊主ぢやが、而てお前様は」、「井筒屋の店の者でムいます、只今は飛んだ失禮を致しまして、朋輩の者が大さう主人に吐られました、お残し下さいました句を主人に見せました處、是非お目に懸り度いと申しますから、何卒最一度お立寄をお願ひ申し度いで」、「は、それは却つて痛み入りました、固よりお目に懸り度くて、お訪ね

申したのぢやから、幾度でも戻りませうとも」。一茶は、快く踵を返した。

成美は若い頃から脚を疾んで、起居の自由を缺き、自ら不随齋と號してゐた。不具の一茶に對して、同病憐れむ惻隱の心からでもあつたらう、快く家に留めて、何時迄も逗留する事を勧めた。

「話は後で緩り出来る、先づ湯にでも入つて、旅の疲れを休めるが宜しからう」、それは何より忝ない、湯といふものにも、最早幾月對面せぬか解りませぬわい、「は、、、これよ、誰か案内してお上げな」。固より裕福な札差であるから、家に毎日風呂は立ツてゐた。

「あ、すツかり旅の垢を落して、久し振に好い心持でムりました」と云ひながら、座敷へ戻つた一茶の顔を見ると、青や赤や色々の斑が、隈取の様に染みついてゐるので、成美は思はず噴飯した。

「は、、、何うなすツた」、「はて、何が其様に可笑うムりますな」と、何にも知らずに、平氣である顔が益す可笑い。「何がではありませんよ、まア一度鏡を見なさるが好い」、「鏡なぞといふものは、ついぞ見た事もムらぬが、一體何うしたといふので」、「いや、何うも慥もない、湯に入つて何をして來なすツたか、それ顔ばかりではない、兩手に迄其通り、得態の知れぬ斑點をつけてゐなさるではないか」、「や、これは大變、は、、、解りましたよ、湯から上ツて軀を拭くのに、つい手拭を忘れて出たので、取りに入るも面倒と、袂にあつた風呂敷で間に合せたが、さては此色が移つたのでムらう」と、平氣で取出して見せた、それも可也汚れた更紗の風呂敷だった。一茶に慥無頓着は、珍しい事ではなかつた。間もなく下谷坂本に借家をして、不自由な一人暮らしを始めたが、自分では別に不自由とも思はず、

柴の戸や錠の代りに蝸牛

と吟んで、勝手に四方へ遊び歩いた。家にゐても雨戸も開けず、晝夜行燈を點け放しにして、目が覺めれば喰ひ、飽けば寢轉んで匂を作るか、それにも飽きると時を構はず飛出して、出るも入るも、人の守る時間杯には従はなかつた。

誰が目にも放埒な身持、而して匂も亦勝手氣隨に、心の赴く儘に吟出るのが、舊式を墨守する葛飾派の人々と、逆も相容れる筈はなかつた。遂に一派の規矩を棄るものとして、白芹の名に依つて破門せられた。併しそれを苦にする様な一茶ではなかつた、寧ろ好い幸ひにして、自ら號を一茶と改め、菴を俳諧寺と稱して益自由の句風を發揮した。

七

「珍しく今日はお在の様ぢやな」と隣の婆さんが、箒を持って入つて來た。

「お、婆さんか、何か用かの」、「相變らず行燈は點てゐますな、まだ油はありますかえ」、「あると見えて消ない様ぢや、まア上ツて茶でも飲みなさらぬか」、「お

や珍しい、お茶が沸てゐますかえ」、「いや沸てゐぬから、沸して貰はうと思ふのぢや、あは、」、「やれ、大方那摩事だらうと思ひましたよ、時に少し雨戸でも開けては何うですえ」、「いや、此儘の方が可い、俺は明るい處が大嫌ひぢや」、「おほ、何處迄も變つたお方ぢや、それにしても晝間行燈を點けて置いては、第一油の費えではムりませぬか」、「其代り煙草の火に不自由をせぬでな」。一茶は爾云ツて、何時でも燈心がなくなると、財布から小錢を取出して、油皿の中へ入れて置くので、隣の婆さんがそれを役得で、不在でも構はず一日隔にはやつて來て、そこらの掃除をしたり、汚れ物を洗つて往て呉たりするのだツた。而も一茶は、那摩事迄は氣がつかないでゐた。

客が來ると飯時分には、近所の飯屋へ連れて往て、一緒に飲食した後で、勘定は各自割前にして拂ツた。

郷里柏原から飛脚が來て、恩師若翁の訃を傳へた。

此便り聞くととてある夜一時雨

「茶は斯く吟んで、早々歸つて墓詣りをした。手向の句は、夕暮に土と變るや散る木の葉」

といふのだつた、久潤で歸つた我家に、妻は泣いて愚痴を吐いた。

「それなら江戸へ連れて行かう、旅の苦勞をして見る氣か」、「お前さんの行く處なら、何處へでも行きますよ、旅の苦勞が怎麼でも、一人で貧乏世帯を張つて、子供を育てる苦勞より、豈夫辛い事はムんすまい」。

乃で今度は、本所番場に世帯を持つたが、一茶の性行は、固よりそれが爲に變る筈はない。風流三昧に家を顧みず、衣食にすら困る貧乏を棄て、氣に向けば日數を厭はず、天を笠とし地に緒を篋けて、何處の涯迄も行脚に出る、幾年待つても變らぬ窮苦に、妻が遂う根負をした。

「お前さんと一緒では、逆も一生浮ぶ瀬はないから、何卒私に暇を下さい」、「さ

うか、女房に愛想をつかされては、引留めても仕方があるまい、勝手にするが可からう」、「女の子は母親に附くが慣ひ、娘は私が連れて行きます、男の子はお前さん育て、下さいよ」、「うむ」。夫婦の間には混藏と名けた、生れて間もない嬰兒があつた。

「さア、話が決つたら去狀を下さい」、「待て、今書いて遣る處ぢや」。

糸瓜蔓切てしまへばもとの水

離縁狀の代りに渡して、一茶は道に淋しい顔をした。

八

柏原在赤澁村の百姓富右衛門の女房が、子を失つて乳の始末に、里子を求めてゐると聞き、一茶は遙々混藏を連れて郷里に歸り、貧乏の中から多分の手當を仕送つて、之が養育の事を頼んだ。

「それはまアお氣の毒な、やれ〜可愛いお子様ぢや、宜しうムりますとも、俺

も女房もえらい子煩悩でムりますから、決して御心配は要りませぬ、大切にお育て申しますよ。夫婦は左右からチャホヤと、下へも置かぬ様に追従を云つた。何分お頼み申しますぢや、乳は充分にムらうな、それは最う、お案じなされまな、近所の子供に分けてやりましても、呑きれぬ位出ますので、ほ、ほ、ほ、此年になりまして、却つて極りが悪い位でムりますよ、いやそれが何より重畳ぢや、好い里親を持って、此兒も漸と仕合者になれたといふものぢや。一茶は安心して江戸へ歸つた。——處がそれが大きな間違ひで、乳が出る杯とは眞赤な偽り、唯だ仕送りの手當が欲しさに、慾で企んだ拵へ事、今もよくある貰ひ子喰の鬼夫婦であつた。

人の見る前では、如何にも乳を呑せる様に、深く懐に顔を埋めさせて、揺ぶりながら抱いてゐるが、決して乳房は見せなかつた。其筈で、呑ませるものはいつても湯と水ばかり、頑固な兒はそれが爲、唯だ腹ばかりは膨れても、軀は漸

次瘦細るばかり、遂に劇しい下痢を起して、芽生の中に敢なくも枯れた。

江戸で此報知を聞いた一茶は、悲歎の餘り聲さへも出さず、前後不覺に泣伏したが、やがて涙に咽びつ、

撫子や地藏菩薩のあとさきに

と吟んで、終日戸を鎖して外へ出なかつた。郷里へ歸つて、此真相を聞いた時、一茶は身を顛はして怒り歎き、富右衛門の人面獸心を罵つて、

もの言ぬ幼の口を赤澁の、水の責とは鬼も知らじな

乳戀しち、こひしとや蓑虫の、泣明しけむなき暮しけむ

と詠んだ。自分が子供の時分から冷い世間に泣いて育つた、け、幼い者に對する憐愍の情は殊に深く、風流の外に佛典を學んで、御佛の大慈に隨喜した心は、やがて禽獸の上にも及び、非情の草木にも加はつて、明惠寺の幼兒鷹丸が、芹摘に出て橋を踏外し、雪解の水に押流されて、果敢なく消た時の如きも、我子の様に

悲しんで、

思ひきや下萌急ぐ若草を、野邊の烟になして見んとは
と詠み送ッて、親の心を共音に泣いた。

九

鴉の親は子を取られて、終夜其家の棟に啼てゐるのが哀れだとして、

子を思ふ闇やかはゆい〜と、聲をからすの鳴明すらむ

と吟んだ。鹿の親笹吹く風に戻りけり」といふのも、やはり同じ情であつた。野邊の若草を慰れんでは、長々の年月、雪の下に忍びたる、蒲公英のたぐひ、やをら春吹く風の時を得て、雪問々々を嬉しけに、首さしのべて此世の明り、見るや否や、ほつきりと摘切らる、草の身になりなば、たか丸法師の親の如く、悲しまさらんや」と認めてゐる。

最負目に見てさへ寒き素振哉

目出度さも中位なりおらが春
野の苔も花咲く世話を手に免
露散るや各明日は御用心
瘦蛙負るな一茶こ、に在り
罷出たるは此藪の藪にて候

等孰れも人口に膾炙し、またよく一茶の爲人を現はした句であつた。

文化十年、享和から十三年振で、再び郷里へ歸り住む事になると、多年争ッてゐた財産を、悉く胎異りの弟に與へて、我身には一つも着けなかつた。偏屈で強情な彌太郎も、年を取れば氣が折れるものかと、村の者は不思議に思つた。一茶は「俺は僅かの身上を欲しがつたのではない、惣領としての務めを行つただけだ」と云つた。

而して相變らずの貧乏暮しを、門人や知友が氣の毒に思ッて、米や鹽や、時々、

の小遣錢を貢ぎ、當人の構はぬ衣類の如きも、春と秋とに製ツて贈ツた。
 一茶は或る時、新しい布子の綿を引摺りながら、平氣で表を歩いてゐた。「彌太郎殿、衣類はまだ新しさうぢやが、裾の方は何うさしやツた」、
 「は、は、これは、折角連中が製へて呉れたのぢやが、今日初めて着て見ると、丈が少し長かつたので、菜切庖丁で切つたのぢや、長いものには捲れるといふが、さて慥うなツて見ると煩いものぢやな」。相手は呆れて行過てしまつた。

切ツてしまへば元の水と觀じて、女房を糸瓜と思つた一茶も、縁あつて再び後妻を貰ツた。而して間もなく娘が生れた。六十近い老の子に、可愛さは一層深く、さとして名けて掌中の珠と慈しんだが、よくよく子には縁が薄かつたと見えて漸と二つになつた處を、又しても可惜瘡瘡に取られてしまつた。

其當座一茶は夜なく、茶毘場の邊を徘徊して「親も來た處ぢや、子もこ、へ來た、靈魂が残つてゐるなら、逢ひにムれ、逢ひに來て呉れ」と、物狂はしく泣叫

んだ。

其娘の母にも先立たれて、一茶は愈々孤獨になつた。次の年の八月、月を見て吟んだ句に、

小言いふ相手もあらば今日の月

一〇

一茶は秋晴の好い日に、善光寺へ參詣した。

偶と見ると本堂の丸柱に、長崎の舊友の名が記されて、八月二十八日に參るとあつた。一茶の參つたのは二十九日だつた。「僅か一日の違ひで残念な事をした、昨日來たらば逢へたものを、彼地へ往た時分には、一つ鍋の物をも喰合ツた仲だが、最う三十年も昔になる、四百里餘りも隔ツてゐては、また逢はれる年でない」と歎じて、

近づきの樂書見えて秋の暮

と口吟みつ、夕風寒く下山した。一茶の行脚は全國に涉つて、東は陸奥の奥から、西は九州の果迄も足跡を印め、到る處に句を残した。

娘を失つた文政二年の冬、十月十六日から中風に罹つたので、再び流遊の望みも絶え、餘命まだ幾何もない事を感じて、安心決定の詞を造り、

兎も角もあなた任せの年の暮

と吟んだ、師走二十九日、五十七歳の暮だつた。併し壽命はまだ残つて、又た新しい春を迎へたので、元日の句には。

今年から丸儲けぞよ娑婆の空

と吟んで、以來蘇生坊と稱してゐた。併し貧苦は益迫つて、租税の滞納も數ヶ月に及び、名主の督促は矢よりも厳しいので、「自分では世を棄て、も、世の方で俺を棄て、呉れぬ、心にもない點料杯取つて、隱約の志さへ果す事が能ぬ、今は家をも身をも棄てる事を、塵芥とも思はぬけれど、病の爲に脚を取られ、棄て

に行く山も林も遠い、あ、是非もない」と嘆息して、力なげに一書を認め、年貢御免の歎願書を、奉行所へ出した事もあつた。

去た女房に連れられて往つた娘は、既に成人して、中村某の妾になつてゐるが、見苦しい父の出入を嫌つて、親子の情も薄いので、先から住來もしなかつた。

惜からぬ命を存へて、文政十年(九十二年)の霜月、持病の上に老衰が加はつて、今度は愈頼み少う見えた。見舞に集まつた門人を、枕許に呼寄せて、「俺が死んだら、必ず正風の句を學んで、苟且にも俺の様な真似をするのではないぞ」と誡めた。一茶は己を知ると共に、また門葉の中に、決して其真髓を、解してゐる者のない事をよく知つてゐた。一茶の風調は、一茶一人の風調であつた。

曾て或人に、孫が生れた誕生祝ひの句を求められて、「親は死ね子は死ねあとで孫は死ね」と書てやつた事や、又近所から出た火事に、草庵が類焼の厄に遭つた時、靜かに筆と硯だけを頭陀袋に收めて、居廻りの杜に避難しながら、燃上る火

の手を眺めて、「螢火も餘せばいやはやはやはや」と口吟み、或ひは常に自ら稱して「信濃國を食首領」と云てゐた様な心境は、無論一茶の外に、倣ふて至り得る事ではなかつた。

其月十九日、遂に臨終と見た門人が、「何ぞ辭世でもありませんか」といふと、一茶は么微に口を動かして、

鹽から鹽に移るちんぶんかん

と云つた。而して木の葉と共に散つた。享年六十五、火葬にして明惠寺に葬つた。其後門人が記念に建てた、「松蔭に寝て喰ふ六十餘州哉」の句碑は、今も残つてゐる筈である。

田崎草雲

谷文晁の堂々たる立關へ、見すばらしい装をした貧書生が、案内を求めた。

「川崎の梅翁の許から参りました、先生にお取次を願ひ度い」と、一枚の手札を出した。それには田崎梅溪と記してあつた。「暫くお待ちなさい」と云つて、取次の門人は引込んだ。

文晁は當時江戸隨一の大家、高く自ら標持して、如何なる權貴にも、決して膝を屈しないのを誇としてゐたが、後進に對しては磊落で、怎麼貧生にも、面會を拒む様な事はなかつた。

「此方へお通りなさい」と、聽て先の門生に導かれて、其書室へ通された。立關には周圍の擦切れた藁草履が、淋しう残つた。

文晁は最う七十を過ぎてゐたが、丸々と肥つた老人で、南向の縁先に、油紙の日蔽を懸た、暖かい書室で、何やら描かけの畫を、片寄せながら引見した。

「俺が文晁ぢやが、何の用で來なすツた」、「田崎梅溪と申す、未熟者で△ります、先生の御高名をお慕ひ申し、お教を願ひ度いと存じて罷出ました、御門人の末にもお加へてさらば、難有い仕合に存じまする」、「あ、左様か、梅翁の許にゐなさるさうぢやが、何故止して此方へ來なさらうといふのぢやな」、「はい、實は其、師匠の事を兎や角申しては相濟ませぬが、師匠梅翁は文人で△ります、畫は其餘技に過ぎませぬば、若し先生に於て、私の入門をお許し下さりますならば、師匠も嘸喜ぶ事と存じまする」、「成程、梅翁の許には長くるなさるか」、「滿一年に相成ます」、「其以前誰かに教はツた事がありなさるか」、「父が翠雲と申して、畫を好みました、又先生の御門人金井烏洲は、縁故の者に△りますゆゑ、神保町のお邸へお出入の節、學んだ事が△ります」、「あ、烏洲の縁邊か、神保町のお邸へば、戸田大炊頭殿御藩中ぢやな」、「藩中と申しても、ほんの微祿の者に△ります」、「兎に角それならば、試みに何か描て見なさるが可い、筆も紙も茲にある、

梅翁の門人といふなら、やはり梅が可からう、「逆もまだ、御覽に入れる様なものも描けませぬが、お言葉に隨ひ、では拜借仕ります」梅溪は自ら紙を舒べて、文晁の見る前にさらりと、江南の一枝を揮灑した。而して自分でもよく出來たと思ツた。筆の運びに目も放たず、眺め入ツてゐた文晁は、愈描了ると同時に、其毫を握く梅溪の顔と、出來上ツた畫とを暫く見較べてゐたが、何と思ツたか、ふ、んと鼻先で嗤ツた。「何だな、それは」、「仰せの梅を描ました、お耻かしう△ります」、「梅翁に習ツたといふ梅はこれか、何だ恁麼畫、文晁なら足で描て見せるわ」云ふかと思ふと立上ツて、折角咲たばかりの花を、散々に蹂躪ツて、其儘衝いと奥へ入ツた。——梅溪は嚇となツた。

「文晁が何だ、老人だと思ふから禮を厚うして、下手に出れば増長して、何といふ無禮な振舞だ、第一壽を見る目もない癖に、大家顔が凄じい、門人に杯此方から願ひ下だ、頼んでもなッてやるものか」。切齒して立上った梅溪は、いきなり床の間に供へてあつた、神洒徳利を取るより早く口を附けて一息に呑干し、ふつと息を吹きながら、「よし、俺も田崎梅溪だ、今に最と上手になつたら、屹度文晁と技競べをして、今日の耻辱は雪いで見せる」と、席を蹴立て門を去ると、其足で直ぐ春木南溟を訪れた。南溟は當時文晁と共に、斯界の二老と稱せられた、同苗南湖の子であつた。

草雲名は芸、諱は明義、通稱を恒太郎と云ひ、草雲は其字であつた。父常藏は、野州足利藩主戸田大炊頭忠文に仕へて、二人扶持の足輕であつたが、草雲の胎に宿つた頃は、浪人して根岸に佗しく住つてゐた。

草雲には既に、きよよ、ここの二人の姉があり、殊にきよよは病弱だつたので、父常藏は貧苦の中に、迎も三人の子は育てられぬと、妻ます子に命じて、慇懃ながら胎の子は闇から闇へ遣れと命じた。

其夜ます子は、白の碁石を呑むと夢みて、夢占を所天に求めたけれど、常藏は一笑に附して、早く黄王散を購て飲めと促した。ます子は止むなく、夜更けて鼠屋の表を叩いた。

悄乎として出て往たのが、歸りには何故かいそくとして、元氣よく所天の前へ出たので、「何うした、薬は買つて来たか」、「はい、買つては参りましたが、それよりも不思議な事には、鼠屋の簷下で、偶と足下に白く光るものがありましたので、何心なく拾ひ上げて見ると、これ此通り白い碁石では有りませぬか、前夜見た夢と云ひ、又今夜のこれと云ひ、私は何うも不思議でなりませぬ」、「ふウむ」と云つて常藏も、道がに腕を拱いたが、少時あつてボンと膝を叩いた。

「よし、最早薬を飲むに及ばぬ、棄てしまへ」、「えッ、それではお助け下さりませるか」、「うむ、碁石の白は勝石ぢや、これは吉兆に違ひない」。

草雲は斯くて纒に助けられた。

果して験が現はれたのか、常藏は間もなく舊主へ歸參が叶ひ、表神保町の藩邸に住む事が出来る様になつた。それから三月目、文化十二年十月十五日、月満ちて生れた男子、賜の字義を探つて、幼名を資助と命け、後頼助と改めた。

此子生れついて聰慧、六歳既に實語經を誦んじ、七歳にして素讀を學び、十歳の時には、悉く四書五經を卒へた。畫は父の畫才を繼いで、八歳の時既に大人も及ばぬものを描いた。十歳で主家の茶坊主に召され、矢張白石の端に因んで、名を瑞白と改めた。

三

草雲に取て、生の親であす。同時に、また命の親でもあつた母ます子は、貧苦

の裡に草雲が十三の歳、病を得て遂う歿つた。

草雲にはまだ、幼い妹が二人あつた、夫婦の外に五人の子を抱へて、僅か二人扶持の足輕だつた父常藏が、好んで描いた畫を沽つて、米鹽の資を助けたのも、實は止むを得ざるに出たのだつた。而もそれが爲に、家計を裕にする杯とは、望みも得ない事だつたから、可愛い我子に同じ轍を履ませて、藝が身を助ける不仕合せは見せ度くないと、草雲には決して畫を教へず、無論手本も與へなかつた。草雲が子供の時分から、巧に之を描いたのは、父の不在を窺つては、其扮本を偷み寫して、獨りで稽古したのであつた。

茶坊主として奉公に上つてからも、暇さへあれば筆を弄つて、よく上役に叱られたが、併し自分でも、之に一身を委ねる氣はなく、又固より家の職を襲いで、足輕に甘んじてるやうとも思はなかつたから、進んで士班に列し度いと、史書を讀み、兵學を講じ、努めて擊劍柔道をも學んだ。

天保二年十七で、元服し、通稱を恒太郎と改めたが、家格が低い爲、容易に士分になる事は能なかつた。家に歸れば後の母がゐる、それには賢三といふ連子があつた、繼母の名はとよ、其心では賢三を、草雲の妹に配はせて、田崎の家を嗣せ度い事が判つたので、草雲は故と放埒に身を持崩し、遂に二十の夏家出をして、野州郡賀郡眞名子に在る、一族の宗家羽山氏を頼り、半年ばかり百姓の手傳ひをして暮した。

翌年の春再び江戸へ歸つて、仕官の途を求めたが、固より何處にも、手を受け待つて呉る處はなかつた。襤褸を纏ふて小川町の通りを、寒さうに歩いてゐる後から「そこへ行くのは田崎ではないか」と、不意に聲を懸られた。驚いて振り返つて見ると、舊主戸田家の臣で、川上重右衛門といふ重役だつた。「お、矢張恒太郎だつたな、去年家出をしたと聞いたが、何をして居る」、「別に何も致しては居りませぬ、御覽の通り尾羽打枯して、お恥かしい姿をお目に懸まして」、「何うだ

な、詫を入れて今一度歸參を致さぬか、執成して遣はすが」、「有難うはムりまするが、此儀はお断はりを申上ます」、「何故だ」、「一旦お暇を願ひましたものが、何の功もなくして、歸參を願ひ申しては相濟みませぬ、殊に又私御奉公を願ひます時は、折角田崎の家を譲り、父の職を襲がせやうと存じました、義弟への志が無になりまする、御芳志は忝けなう存じますが、其變り、決して二君には仕へませぬ、やはり好な丹青の道で、別に一家を立まするゆゑ、何卒義弟を私と思召、よしなにお引廻しの程、願ひ申し上まする」。

四

川崎の梅翁は旗本の隠居で、姓を加藤といつた。詩歌文章に長じ、書畫を善くし、傍ら易を講じて、自ら隠士を以て任じてゐた。畫は北宗から出て四條派を摸し、殊に梅花を得意として、梅翁と號した位、雪中の紅梅杯は、最も珍とすべきものであつた。

川上重右衛門の推舉を斷つた草雲は、恰も此梅翁が、講室の世話をする門生を欲しがつてゐると聞き、傳手を求めて其學僕となり、乃ち師の一字と、眞名子にゐた頃暇さへあれば寫生に往た梅林の谷とに因んで、梅溪と號したのだつた。

金井烏洲が、不意に梅翁の許を訪れた。「金井の小父さままでは入りませぬか」「お恒太郎か、實はお前がこゝにゐると聞いて、御主人によく頼んでやらうと思つて來たのだ、辛棒して勉強しなくては不可んぞ」「はい、有難う存じます、併し何處でお聞きなすつたので」「うむ、それは、噂に聞いて來たのだ」「ではお邸の、川上様にでも」「さうだ、御主人に取次いで呉れ」梅翁に逢つて、烏洲は間もなく歸つて往つた。

それから更に一年、草雲は梅翁の許に寄食して、南溟の許へも、そこから致へを受けに住つた。技に於て梅翁の壘を摩してゐたのは、既に一年前からだつた。文晁の辱めに發憤して以來、一層目に見えてメキメキと進んだ。烏洲の口添で、

師の家に於る待遇も變り、陰に陽に保護を受けて、充分に勉強する事が能たからでもあつた。

「恒太郎、今日はお前に話があつて來た」「はい」「よく勉強するさうで、大分技も上つて來たな」「いえ、一向に進みませぬけれど、これでも一生懸命で△ります」「さうであらう、其志に愛て見せるものがある」「何で△ります」。烏洲は懷中から一通の手紙を取出した。「これを見い、文晁先生のお手紙だ」「えッ」「而も去年の今頃、お前が先生をお訪ねした時、俺の許へ下されたお手紙だ、頂いてよく拜見しろ」。

草雲は怪訝の面色に披いて見た。「お前の舊門人草雲といふ若者、梅溪と號して今川崎の梅翁の許にゐる、今日俺を訪ねて門人になり度いといふから、試みに畫を描せて見た處、非凡の技を有てるる、後年必ず名を揚る者と見たが、慢心させでは爲にならぬから、故と貶しつけて辱めて歸した、すると非常に立腹して、

必ず俺と技競べをして見せると罵った、其氣概が愛すべきだから、お前から竊り梅翁に頼んで、目をかけてやる様に盡力してやれ、屹度意地になつて勉強するに違ひない」といふ意味が、懇に認めてあつた。

「あッ」と云つた儘、草雲は言葉も出さず、目からは涙が滂沱として流れた。

五

夢にも知らなかつた文晁の好意に、感激した草雲は、烏洲に乞ふて其手紙を貰ひ受け、漢装して長く、白石山房の燕居に掲げてゐた。——更に烏洲の紹介を得て、文晁の許に束脩を納め、愈其名を門人帳に加へられたのは、天保八年夏の事だつた。

文晁の寫山樓は當時に於る、文人雅客の社交俱樂部で、玄關構へは厳しかつたが、中へ入ると宛然待合茶屋か何ぞの如く、大名の隠居、旗本、町人の物持杯が、毎日何十人となくやつて來ては、碁を打つ、將棋をさす、酒を飲む、謠をやる、

骨董をひねくるといふ有様、門人にも先輩が澤山ゐるたから、貧生草雲の如きは、容易に其左右に侍する事は能はず、いつも隅の方に小くなつて、先輩門人に對する師の畫論を傍聽する位が關の山だつた。

併しさうした風の生活をしてゐた文晁も、一度畫の事になると、忽ち嚴しい先生になつて、門人の描た物杯に對しては、毫しも假借する處がなく、此處が悪い、そこが不可と云つてゐる中に、クル〜と丸めて投棄する様な事は珍しくなかつた、偶々大名の隠居杯で、多少斟酌しなければならぬ様なものに向ふと、一わたり批評を濟した後、粗忽の振をして故と茶碗を引くり返し、イヤこれは粗忽致したと云つて、無遠慮に其畫で拭いてしまふ、其中で唯一人、渡邊華山の描たのに對してだけは、引裂きもせねば茶も零さず、丁寧に披けて見て、又丁寧に巻いて、それから可否の意見を述べた様に、決して龜末に扱はなかつたと、これは草雲の直話であつた。——草雲杯もやはり二度ばかり引破つて、クル〜と丸められ

た組だつた。

其年の秋、草雲は初めて筆を載せて遊歴の途に上り、常陸の俠客嘉藏の許に三日間逗留したが、繪師らしくない其風采と面魂とに、隠密と間違へられて、意外の馳走になつた滑稽もあつた。漸く素情が判るに及んで、嘉藏は更に歡待して、扱懇に意見をした。「恁麼年に遊歴をなすツても駄目ですよ、それより一旦江戸へ歸つて、又た世並の好い年に出ておいでなせえ」と、一封の金を包んで錢別にした。それは彼の天保の大飢饉で、到る處餓拳途に横はると云れた年だつた、草雲は其義氣に感じて、成名の後迄親しく嘉藏と往來した。

道中の茶店では、短袴長刀、鐵扇を携へた旅姿に、武者修行と誤られて、流名を問はれた愛嬌話もあつた。

「へえ、畫の先生ですかい、それはお見外れ申しました、それなら幸ひ、恰度お願ひがありますだよ」、「何だな」、「孫めが病氣で、鎮守様へ御祈禱がしてありま

すだ、何卒奉納の繪馬を描いて下せえまし」。

其時謝禮として鑄鐵二緡を恭しく盆に載せて出された、草雲が畫を描始めて以來、初めて得た揮毫料は、此錢二百文であつた。

六

嘉藏の言葉に就て江戸に歸つた草雲は、暫く蟄伏して知人の家に寄食し、幘や燈籠、團扇、提灯の繪杯描いて、纒かに小遣取をしてゐた。

淺草今戸の素封家松井彌左衛門は、新田氏の裔で徳川家と同族といふ處から、家康に隨ふて江戸に住み、陶器の御用を勤めて、今戸焼の元祖となつた家柄、代幕府の扶持を受けて、侍格の列に加はり、名字帶刀を許されてゐた、當代の彌左衛門は豫て梅翁と懇意く、其川崎へ隠退後も、遙々往來して文墨の交りを重ねてゐたので、自然草雲とも知る仲となり、非凡の腕を有ちながら、世に知られずにいるのを憐み、屢米鹽の資を送つて其窮を救ひ、又草雲が繼母の志を察し

て、家を義弟に譲つた話を聞き、深く其氣象に惚込んで、遂に女菊を以て之に配はす事を約した。

菊は當時千代田の大奥に勤めて、才色の聞えがあつたから、婚約の望み手は八方から、降る様にあつたけれど、彌左衛門は皆首を振って、「いや、俺の娘の聲にする者は、一人梅溪の外にはない」と、固く執つて動かさず、二十二の歳に暇を貰つて結婚させた。草雲は二十五歳だった。

筋目正しい富豪の愛娘が、名もない貧乏畫師に嫁ぐ、家人は皆反對した。反對の理由としては、貧乏よりも尙當人の、素行の修まらない事が、最も有力であつた、當時の草雲は、容氣に任せて酒は飲む、喧嘩はする、毎晩の様に家を明けて、吉原へ行く、品川へ通ふ、開ツ放しにして出て行く跡は、近隣の婆さんが戸締りをして呉れるのが例であつたが、或晩其婆さんが不在の時、空巢規ひに襲はれて、鍋釜迄持て行かれ、翌日歸つて喰ふ物がなく、近所の蕎麥屋から饅頭を取つて一

時の空腹を凌いだ揚句、其容器を通り懸りの屑屋に賣つて、それ迄飲んでしまつた事さへあつた。

愈窮すると内職に、大道占をした事もあつた。火翠雲も梅翁も、易占に詳しかつたから、草雲も學び覚えてゐるのだつた。そこへ二三の友人が通りか、つて、無理に品川へ連れて行き、主藏相摸に遊んだ晩、懷中に算木や筮竹を入れているので、忽ち賣卜先生と解つて、冷弄半分に占を求められ、此方も面白半分で、鹿爪らしく験てやると、まるで見徹しの様に的中つたとて、樓中の女共舌を巻き、大先生が故と身装を賤しうして、忍びで上つた者と解し、二階中から遣ひ物の酒肴が、部屋一杯に並べられ、下へも置かぬ疑待を受けたので、「何うだ、俺の艶福を見ろ、初會のモテ方が此通りだ」と得意揚々、徹宵痛飲した話もある。吉原へ行く途中で、奴鰻の犬が煩く吠えるのとて、素破拔をやつた處、犬が素早く斬れぬので、八ッ當りに、障子へ石を投込んで逃出したり、仲之町で往來の按摩の頭

へ、剥抜いた西瓜の皮を冠せて、手を叩いて笑ったり、按摩は西瓜の匂が取れない爲、蠅と蚊とに攻られて、あんな酷い目に遭た事はないと、後で散々小言を云はれた事もあつた。

那麼身持だつたのだもの、可愛い娘を此男の許へ、嫁に遣る事に反對したのは、反對した家人の方が有理だつた。

七

彌左衛門は娘を呼んで、「お前はあの梅溪の事を、何と思ふ」、「はい」、「俺の考へでは、今こそ貧乏書工だけれど、後には屹度成功して、名を揚げるに違ひない男だと思ふ、若い時分の不身持は、誰にもあり勝の事だ、締る時が来れば締るだらう、それともお前はやはり、金持や身分の高い處へ行き度いか」、「いえ私は金や身分は望みで入りませぬ、所天に末の見込さへあれば、怎麼處へでも参ります」。菊はキツバリと答へた。「よく云つた、それでこそ俺の娘だ、其心を何時迄も

忘れず、身を慎んで家を治め、所天が立身した曉、耻かしい女房と唄はれるな、「はい、不束な私ではムいりますが、必ず所天を助けて成功させ、お父様のお名に拘はります様な事は、決して致しませぬ」。慙うした娘の決心で、縁談は忽ち纏つた、婚禮の調度も儀式も質素にして、其費用で所天の研鑽の資を助ける事は、また菊の望みであつた。而して草雲は、初めて今戸に門戸を張つた。

併し草雲の素行は、依然として修まらなかつた。お嬢さん育ちの菊は、又長く大奥の勤めをして、いくら賢女でも世事には疎く、婚禮の口取が決つてから、俄かに炊爨の業は學つたが、而も其釜にある米の値は知らなかつた。

門戸は張つたけれど、まだ名が賣れてゐないから、揮毫を頼みに来る者はなく、會へ出ても若輩と侮つて、誰も敬意を表さないで、氣を負ふた草雲は不平で堪らず、何とかして世間を驚かしてやり度いと、手具臈引てるた折柄、恰度山谷の八百善に書畫會が催された。此時こそと草雲は、故と時間を早めて出蒐て、無遠

慮に正席を占領した。

幹事が驚いて、種々當こすりをいふけれど、素知らぬ顔をして譲らうとせず、平然と毫を揮ふてゐるので、幹事は仕方なく文晁をそこへ案内して来て、「大先生がお見えになつた、何卒席を換へて下さい」、「何、大先生とは誰の事か」と、偶いと顔か上げると文晁なので、追がにハツと思つたが、騎虎の勢ひで、「いや此座は最早先程から、梅溪の席となつてゐる、假令文晁先生でも、豈夫換へよとは仰せあるまい」と、併し微笑みながら會釋した。

「は、、、、、相變らず梅溪の氣焔は虹の様ぢや、私も傍に座つて、其元氣に肖らうよ」と、文晁は笑ひながら次席に着いた。草雲は益々得意に、老師を傍らにして健腕を揮つた。幹事は舌を捲いて引退つた。

後年綽名を「あばれ梅溪」と呼ばれて、文晁の會の厄介者とされ、時流に指彈される様になつたのも、兆は此頃から發してゐた。

八

草雲は遊歴して、日光中禪寺湖畔に立つた。

偶と脚下に、に似た枯木の根の横はつてゐるのを見て、何心なく拾ひ上げて暫く眺めてゐるが、思はず微笑んで、「韓愈が登門の試験を受ける時、自分を龍に譬へて、水を求め難い苦みを叙した文を讀んだ事がある、俺の才は固り韓愈の高きには及ばぬけれど、水を求めて得られない、龍に似た處は同一だ、此木龍も常鱗凡介の類ではあるまいが、僅か一尺にも足らぬ處で、此通り水を得ずに干乾びてゐる、可し、俺が先づお前を水に入れてやらう、若し靈があるなら、速かに雲を起して昇天しろ、お前が遲疑してゐるなら、俺が代つて昇天するぞ」と、高く捧けて湖水に投じた。

江戸にゐても時流に投ぜず、自ら高く矜持して、權門に膝を屈ぬから、門前は常に雀羅を張つて、何時世に出られる當もないので、已むなく筆を載せて屢ば遊

歴に出で、一年の大半は殆んど家に居なかつたから、いつの間にか「遊歴梅溪」の綽名を獲たが、而も遊歴は到る處に失敗して、其都度借金を残して歸る始末に、菊が持て来た小遣錢の如きは、瞬く裡に底を拂ひ、果は衣類調度、頭の物迄賣代して鹽附の資に充てたが、それも何時迄續く筈はなかつた。

天保十四年、草雲が二十九で、夫婦の間に一子を儲け、格太郎と名けたが、草雲の素行は尙修まらず、其年の暮には愈窮苦の絶頂に達して、已むなく風繪を描いて賣りに行くと、問屋は一目見て無愛想に、「これはお断り申ませう、先生の繪は儂り上品過ぎて、逆て兒童には向きませんや、それに慙う精緻く描いちや、目の前で見るには綺麗かも知れませんが、舐つていふ奴は、高く空へ飛すものですからね、上へ昇ると何の繪だか判りやしません、まア他へ持て往て御覽なさい」と、劔もホロ、の挨拶で、何處でも購て呉れなかつた。

「此上は仕方がない、自分で貼つて自分で汚らう、菊、お前も手傳つて呉れ」深

閑に育つて、浮世の風には當つた事もなかつた身が、唯々として所天と共に大道の砂塵に塗れながら、淺草廣小路の露店に、自製自畫の風を鬻いだ。群り寄る觀客の目の前で、草雲が望みの畫を描いてやると、菊は傍から釣糸をつけて渡した。併し珍しいが評判となり、思ひの外に利益を得て、漸く年を越す事が能た。

怎麼貧苦にも菊は決して、辛いと思ふ色をも見せなかつたが、里の松井家では、父彌左衛門が歿つて、兄が家を嗣ぐに及び、見兼て或日妹を呼寄せ、それとなく離縁して家へ歸る事を勧めた。

九

菊は悄乎と肩を窄めて聽いてゐたが、「兄様、お言葉は御尤もと存じますけれど、女と生れて、一旦人に嫁きました以上、貧乏と裕福とは宿命で△います、所天の素行が修まらないのは、諫めて悛す法もありませう、それを悛す事が能ないのは、皆私の不來ゆゑで△います、若し累ひを里に及ぼす様な事がありましたら、其

責は皆私^{せめ}が負^おひます、併^ししまだ、いくら貧乏^{びんぱふ}致^{いた}しましても、人様の袖^{ひたひ}に縫^ぬる様な事は致^{いた}しませんから、家の名前^{うちなまへ}に拘^かはる様な、お氣遣^{きづか}ひには及^{およ}ばぬと存^{ぞん}じます、慥^たう申^{まを}しては兄様^{にいさま}には濟^すみませぬけれど、女^{おんな}としては所天^{せつてん}に貞節^{ていせつ}な、妻^{つま}となり度^たいと思^{おも}ひます、何卒^{どうぞ}最^もう、其様^{そのやう}な事は仰^{おつしや}有^あつて下^{くだ}さいますな」と健氣^{けんき}にも云^いひ放^{はな}つて、身^みの皮^{かは}を剥^はいでも家の爲^{ため}に盡^{つく}し、所天^{せつてん}が遊歴^{いうれき}の不在^{ふざう}中は、鼻緒縫^{はなせぬい}の内職^{ないしよく}をして自活^{じくわつ}した。

而^そして生家^{せいけ}の近所^{きんじよ}にゐる事は、却^{かへ}つて互^{たがひ}の爲^{ため}でないと、弘化元年^{こうわげん}今戸^{いまい}の家^{うち}を疊^たんで、淺草廣小路^{あさくさひろこうぢ}に引込^{ひっこ}み、更^{さら}に嘉永元年^{かえいげん}山谷橋^{やまやばし}の畔^{ほとり}に移^{うつ}つた。

草雲^{くさうん}は其間^{そのあひだ}遊歴^{いうれき}の半^{なか}は江戸^{えど}に在^あつて、或^{ある}ひは華山^{くわざん}を學^{まな}び、靄^{あい}崖^{がい}を摸^もし、又^{また}沈南蘋^{せんなんぴん}、仇十洲^{きゅうじゅうしゅう}、錢滄洲^{せんそうしゅう}、劉松年^{りうしょうねん}等の扮本^{はんほん}を得^えて、日夜^{にちや}潛心^{せんしん}琢磨^{たくま}した。草雲^{くさうん}が此貧^{このつえ}中^{ちゆう}にあつて、沈南蘋^{せんなんぴん}の扮本^{はんほん}に三十金^{さんじゆきん}を投^{とう}じ、仇十洲^{きゅうじゅうしゅう}の畫卷^{がわくわん}に五十金^{ごじゆきん}を擲^{なげ}ち、其他^{その他}研鑽^{けんざん}の資金^{しきん}として、前後^{ぜんご}百餘金^{ひゃくじゆきん}を投^{とう}じ得^えたのは、皆妻女^{みなさいぢよ}菊^{きく}が、實家^{じつけ}の母^{はは}から恤^{あは}ま

れたのを、窃^{ひそ}かに蓄^{たく}めて置^おいたのと、其時^{そのとき}々に奔走^{ほんそう}して、整^{ととの}へた金策^{きんさく}の賜^{たま}であつた。

草雲^{くさうん}も妻^{つま}に對^{たい}して、漬^すがに氣^きの毒^{どく}を感じ^{かん}じた。相變^{あひかは}らずの年^{とし}の暮^{くれ}が近づ^{ちか}じたので、進^{すす}まぬ足を猿若町^{さるわかつちやう}に運^{はこ}んで、森田座^{もりたざ}の座主^{ざしゆ}勘彌^{かんにや}(先々代^{せんじやくだい})を訪^{たづ}ねた。

「梅溪^{ばいけい}といふ畫師^{えし}だが、此年^{このとし}越^こに困^{こま}つてゐる、春狂言^{はるさやうげん}の繪看板^{えかんばん}を描^かかせては下^{くだ}さるまいか」。突如^{たつじゆ}に賣込^{うりこ}れて、勘彌^{かんにや}は驚^{おどろ}いた。「へえ、お名前^{なまへ}は豫^{あは}て承^{うけ}はつてゐますが、併^し芝居^{しばゐ}の看板^{かんばん}は、鳥居流^{とりゐりう}と極^まつてゐますからね」、「其鳥居流^{そのとりゐりう}で描^かかうではないか」、「へえ」、「梅溪^{ばいけい}も畫師^{えし}だ、鳥居流^{とりゐりう}の繪看板^{えかんばん}位^{くらい}、描^かけぬ事もなからう」「では兎^とに角^{かく}、描^かいて見^みせてお呉^くんなさい」乃^{そこ}で狂言^{さやうげん}の筋^{すぢ}を聞^きて歸^{かへ}り、一晝夜^{いちしや}に描^か上^あげて、持^もつて往^{かう}て見^みせると、勘彌^{かんにや}は二度^{ふたど}吃驚^{びっくり}の目^めを睜^{みは}つて、「いや、恐れ入^{おそ}りました、先生^{せんせい}のお手並^{てなみ}も、豫^{あは}て存^{ぞん}じてはりましたが、鳥居風^{とりゐりかう}の畫^えを描^かいて、是程^{これほど}とは思^{おも}ひませんでした、小屋^{こや}へ掲^かけて埃塗^{ほこりまみ}れにするのは勿體^{ちつた}ない位^{くらい}で」と、一封^{ひつう}の金^{かね}を包

んで謝禮に出した。

草雲は心の裡で、多寡が一兩か二兩だらうと踏みながら、歸ッて披て見ると、意外にも五十兩あつたので、これには追がの草雲も驚いた。一枚の畫に五十兩貰つた事は、生れて初めてだつた。

一〇

八百善の雅會に、竹内雲濤を泉水へ投込んでから「あばれ梅溪」の名は益々高くなつた。

雲濤は梁川星巖門下の奇才と云はれたが、傲岸不遜で、酒を飲んで人を罵倒し、制めると忽ち酒亂を發して、到る處に狼藉を働くので、文人墨客は皆眉を擧めて指彈をし、「あばれ梅溪」に對する「酒亂雲濤」の綽名を附けて、雅會荒しの兩大關とし、之に今戸の抱青を加へて、厄介者の三幅對と名け、之等が來ると皆席を避け、連名に其名がある會には、決して出席しないと云ふ者さへある程、蛇蝎

の如く嫌はれてゐた。

其雲濤が、酔て梅溪に喧嘩を賣つた。「文晁が死んでから、今の世には一人の畫仙もない、皆滔々たる畫工ばかりだ」と云れて、草雲も黙つてはゐなかつた。「さうだ、今の世には一人の書家もない、滔々たる者は皆書工だ、雲濤、汝も亦詩工と書工を兼てるのだな、酔拂つて何だかのたくらす處は、まるで天神小僧の見世物藝といふものだ」。雲濤が怒るまい事が、突如立上つて鐵拳を揮つたが、心得のある草雲は、體をかはして襟髪を掴むと、筋斗打せて投飛した。勢ひが餘つて丸窓の障子を破り、中庭に墜ちて雲濤の體は、半ば泉水に浸つてゐた。追がの雲濤も酔が醒めてからひどく愧ぢて、それから急に従順く、先の様な酒亂も出さず、而して草雲とは非常な仲好になつた。

次には越後の蘭溪を凹ました。蘭溪は山水畫が自慢で、やはり傲岸不遜、常に山水でなければ畫でないといふ稱し、花鳥を描く者は繪師、人物を描く者は畫工だと

呼んでゐた。草雲を小供扱ひにして、無禮の言動をしたとて、カツとなる刀を
 搦んで立上った。「やい、肋骨の足りない越後坊の分際として、無禮千萬、今一言
 云つて見ろ」、「うむ、幾度でも云つてやる、那摩物をひねくり廻しても、誰が怖
 がる奴があるものか、圍體ばかり大きくても、描く物は子供にも劣ると云つたが
 何うした」、「えい」と云つて抜放つと、紫電一閃、傍にあつた圓行燈が、梨割に
 なつて眞二つに別れた。「斬れるぞ、これを汝の頭へ見舞つてやる」。

腕の冴えと氣組とに、蘭溪は驚いて眞蒼になつた。「いや、これは俺が悪かつた、
 許して呉れ、以後は屹度慎む」、「は、は、は、梅溪の刀は、亂臣賊子の首を刎る刀
 だ、豆腐の様な汝の骨には勿體ない、串戯だ安心しろ」。塵を拭つて悠々と鞘に納
 めた。

柳橋萬八の會では、事が面倒になつた。相手は旗本の暴れ者、四谷六方白柄組
 の一黨、これが又文墨の會に出入して、直參の威勢を笠に暴威を揮ひ、狼藉を極
 めた。

めた。——其一人に草雲が引懸つたのだ。杯盤崩れ飛んで、二人は忽ち格闘を始
 めた。

「暴れ者同士の、これは好い取組だ」。畏れて八方に散つた會衆は、目引き袖引き
 又立戻ると、漳卷にして珍しさうに眺めてゐた。

一一

上になり下になり、組んづぼぐれつ、や、半刻ばかりも揉合つたが、勝負がつ
 かぬ間に二人共疲れた。

「此上こゝで争つては、家へも氣の毒、外の者にも迷惑だ、表へ出る」、「うん、何
 處へでも行く」。草雲は一人、白柄組は相手の外に、四五人も黨類があつた。併し
 草雲は怖れる色もなく、平然として表へ出た。

「勝負は向島でつけやう、船へ乗れ」、「うん、乗る」。云はる、儘に船へ乗つた。
 隅田川を溯つて、吾妻橋を潜り、竹屋の渡を渡切つて、言問も過ぎた。「何處迄

行く、「何處へでも、行く處迄來い」、「うん、行く」。聽て船は、杭半の河岸へ着けられた。「さア上れ」、「よし上る」。一人の草雲を四五人で取巻いて、庭傳ひに座敷へ連れて來た。座敷には白柄組の首領らしいのが、藝者を引つけて飲んでゐた。「うむ、汝が梅溪が、待兼てゐた、よくも萬八で、黨の者に耻辱を與へたな、ここへ來たのは飛んで火に入る夏の虫だ、敵はぬ處と觀念して、首を伸べて待つてゐろ」、「は、、、、卑怯者が何をするかと思つたら、茲迄加勢を頼みに來たのか、意氣地のない奴等だ、固より命は覺悟の前だが、梅溪の首には骨があるぞ、勝負は刀がつけて呉れる、斬れる者なら斬つて見ろ」。ヒラリと中庭へ飛降りると、刀を抜いて身構へした。

「まア待て、何うせ貰つた命だから、茲にゐる七人の刀で、汝の軀は膽斬にしてやる、併し好い度胸だ、其度胸に免じて末期の水代りに、汝が好物の酒を遣る、飲め」。自ら大盃の滿を引いて、更に草雲に與へて藝者に酌をさせた。「面白い、湛

湛と濺いで呉れ」。莞爾として、一息に飲干した。「美事な飯振だ、最う一盞重ねろ」。「うん、何杯でも重ねる」。黨首は初めて微笑んで「梅溪、汝中々快男兒だな、此儘殺すも惜いものだ、何うだ各自、此盃を順々に廻して、飲めない者は決闘の仲間から省く事にしては、眞劍勝負の前に、酒合戦も一興ではないか」。一同賛成して飲始めたが、一巡二巡、其内に一人倒れ二人潰れて、残つたのは黨首と草雲とだけになつた。

「は、、、、口程にもない奴等が皆倒れた、残るのは梅溪と足下だけだ、さア尋常に勝負しやう」、「いや、最早それには及ばぬ、貴公は尋常の畫工でない事は解つた、こゝらにゐる連中は、皆貴公の敵ではない、無禮は當方より詫る、何卒意趣は此盃洗に流して、以後別懇に願ひ度い」。乃で酒肴を新たにして船に積ませ、藝者に送らせて山谷の家へ歸した。

「俸はまだ起てゐるか、今日は決闘に勝つて來た、分捕が此通りだ、食はせて遣

れ、は、は、は、。一刻前、死生の間にある事杯は忘れた様に、草雲は家人を顧みて、
 呵々と笑った。

一一一

河鍋曉齋は、自ら狸々を以て任じ、大酒を以て誇つてゐた。

同氣相求める草雲とは、豫て大の仲好であつたから、一緒になると毎も酒で、
 而も互に譲らず、飲始めると果しかなかつた。

曉齋は或る日酔墨を濺いで、狸々舞の圖を描き、酒瓶に「狸々狂齋」と署名し
 た。「何うだ、これでもまだ降参せぬか」。草雲はふ、んと鼻で笑ひながら、やには
 に其毫を奪つて、狸々の上へ巨龜を描き、甲羅に「正覺坊梅溪」と記した。

「は、は、は、こいつは参つた、狸々が如何によく飲んでも、正覺坊には及ぶまい、
 口惜いけれど負て置く」と、遂う曉齋の方から我を折つて、以來草雲の事を「阿
 兄々々」と呼ぶ様になつた。

曉齋は下總古河の産、幼少の頃父に伴はれて江戸に出で、初め駿河臺の狩野愛
 信に學び、中年には土佐風を撮り、更に鳥羽の骨法を慕ふて、飄逸の戯畫に
 長じ、丹青界の畸人として知られてゐた。

「阿兄ゐるか、狸々が来た」、「おや、入来しやいまし、何卒」と菊子は愛想よく
 迎へて、書室へ通した。「お内儀いつもお邪魔をして済みませぬが、今日は飲み
 参つたのではないから、御安心を願ひたい」、「ほ、何を仰有いますやら、いつ
 もお構ひ申しませんで」、「お内儀にさう出られると一言もない、併し梅溪を阿兄
 といふ以上、お内儀の事も姉上と思つて、つい我儘も申すのだから、何卒お許し
 下さいよ」、何を管らない事を云てゐるのだ、相變らず好い機嫌だな、と草雲が
 奥から聲をかけた。

「いや、今日は好い機嫌ではない、癪に障る事があるから、力を借りに来たのだ」、
 「汝の癪に觸るのは、不絶ではないか」、「阿兄だつて、他の事は云れまい」、

體何うしたといふのだ、「今日の八百善の會へ行くだらうな、」うむ、行く積である、「それぢや例の、氣取屋征伐をやっつけやう、」は、、、隆古の事か、可からう。

隆古は秦氏、奥州白河の産で、長く江戸に住み、京都にも遊んで、やはり鳥羽僧正の畫風に私淑し、人物畫の妙手として知られたが、常に邊幅を飾って諸會に出席し、豪然として儕輩を見下すのが、草雲にも曉齋にも癩に障って堪らなかつた。

「菊、それではこれから曉齋と一緒に、八百善の會へ行く、着物を出して呉れ、「はい。」家には米を買ふ錢さへない時でも、菊はそれ等の會へ出席する會費だけは、何うにかして工面をした。愈出懸る時「行ッてお出なさい」といふ時は、必ず一分か二朱財布に入れてあり、「少々お待ち下さい」といふ時は、屹度それのない時であつたと、草雲は後に人に話した。

「往ておいでなさい」と菊は笑顔に所天と曉齋とを送り出した。

一三

八百善の會へ往て見ると、隆古は果して來てゐた。

白綸子の小袖に、紫袴を穿て、悠然と座に着いた形は、何うしても燕居にある公卿の姿であつた。兩人は苦笑ひしながら、故と其左右に別れて席を占めた。

隆古が用ひてゐる硯は、曾て高久靄崖が秘藏した名品で、時價二百金と稱せられたもの、隆古は靄崖の聲になつてゐた事があるから、其關係で譲受けたのを、自慢で何處の會へも携へて行くのだつた。

「曉齋、汝の處に墨汁があるか」と、草雲は突然、書さしの筆を擱いて聲を掛けた。「うん、あるが何うした、」硯が乾いてしまつたんだ、磨るのも面倒だから、少し呉れんか、「諾、此方へ出すが可い。」言ひながら目配をした二人は、硯から硯へ授受す眞似をして、故と隆古の頭の上へ零してしまつた。「や、何をする、」お

お、これは飛んだ粗忽をした、つい手が滑ったので、併し秘蔵の硯へ取落さなくて幸福だった、まア勘辨して貰ひ度い、「那摩亂暴をされて堪るものか、やアこれは大變だ」と隆古は慌て、立上った。肩から背中へ浴びた墨汁は、更に八方へ飛んで、雪白の小袖は滅茶々々になつた。「は、、、併し自然の澹墨で雲煙が出来た」、「成程、こいつは好い、阿兄の筆で今の内に、雲間に龍を描いては何うだ」。隆古は物をも言はずに、硯を片付けると其儘、ぶりくとして立去つた。「は、、、は、奴情つて往つたよ、「遺の氣取屋も驚いたらう、併し策戦通り巧く行つたな」。周圍の者は肩を擡めて、一座白け渡つた中に二人は手を叩いて哄笑した。
 恚歴亂暴を働く草雲に對して、同じ亂暴者の曉齋は兎も角も、其他の名流で、草雲と親く往來した者は、唯り梁川星巖と、其門下の二三に過なかつた。其星巖もやはり清貧、或日五兩の金に困つてゐるのを見て、「宜しい、手前が引受けた」と、立派に請合つて出て往つたと思ふと、暫くして言葉の通り、耳を揃へて持て

来た。星巖も喜んで、一時の急を免れたが、聽て氣がつくと、貧乏者の梅溪に、五兩の金策が容易に出来る筈がない、何うも出所が訝しいと、直ぐ又他から金策して、草雲の許へ返しに往つた。
 「は、、、いや御不審は尤もだが、何有それ程怪しい金ではありませんよ、唯だ一寸借りて来たので、「何處から借りて来なすつた」、「傳法院の觀世音から」、「それはまた何ういふ譯だな」、「何有彼等の老僧は、豫て懇意いから、金策を頼みに往た處、生憎不在で、歸りの程は判らぬといふ、急場の入用と承はつたから、べんぐと待つてもらられぬで、佛壇を見ると觀世音の厨子に、古代錦の戸帳が懸つてゐたから、一寸借用して質入した迄の事で、それも無斷で致したのではない、ちやんと佛に斷はつて来たので」。星巖は呆れて二の句が續けなかつた。

一四

星巖は自ら質受した戸帳を携へて、傳法院へ謝罪に往つた。

老僧は呵々と笑つて、「無頼着な先生の事ぢやから、菩薩もお咎めはなさるまい、佛に斷つて持出したといふのも、大方本統の事でムらうよ」と云つてゐる處へ、後から草雲もやつて来た。「今も話をしてゐる處ぢや、方便の罪は、佛もお咎めなさるまいが、唯だ愚僧が迷惑致すぢや、今後若し急要の場合は、衣類調度、何でも勝手に入質して差岡へムらぬが、佛前の什器だけは、御容赦に與り度いものぢや」。草雲も星巖も苦笑して、匆々に辭し去つた、草雲は當時既に山谷から、傳法院の前に移轉してゐた。

親友の川島栖山が遊びに来た。「恰度好い處だ、これを見て呉れ」と、一幅の山水畫を出して見せた。「ほう、華山だな、何處から手に入れた」、「華山と見えるか」、「立派な華山ではないか」、「は、、贋物だ、一寸やつて見たのだが、華山で通るなら、一狂言書けるんだ」、「ふウむ」、「實はあの岡田の奴、俺の畫を評して、霸氣満々と云つたさうだ、霸氣とは銜氣の事であらう、貴公これを持って往て、岡田

に鑑定させて呉れないか、買ふと云つたら賣つても可い」、「は、、成程、こいつは面白い」。

鑑定家の岡田某は、栖山の持て往つた僞華山を見ると、果して一杯喰つて、眞蹟に違ひないと、高價を拂つて強て購取つた。草雲は栖山から其金を受取ると、早速岡田を呼にやり、酒肴を調へて饗應した。稍酒の酣つた處で、「一つ鑑定して貰ひ度いものがある、これを見て呉れ」と一軸を取出した。岡田は何心なく繕いて見ると、曩に栖山から購めた華山と、寸分違はぬ同圖なので、思はずアツと驚いた。「は、、、何うだな、此畫を假に、華山として見れば霸氣はなく、梅溪とすれば霸氣満々であらう」。岡田は眞赤になつて、暫しは言葉も出なかつた。

草雲の畫に霸氣があると云つたものは、後にも門人の相場古雲があつた。草雲は其時冷かに晒つて、霸氣は俺の生命だ、若し俺に霸氣がなかつたら、俺の畫は死んだ畫も同然だ、市氣の満々たると、俗氣の紛々たると、此二つは俺の門の大

林物だ、古雲お前も亦覇氣のある物を描く様に勉強しなさい」と云った。古雲は三斗の汗を絞って、一言もなく退いた。

「岡田の奴が、大天狗の鼻を挫く爲とは云ひながら、今更考へると悪い洒落であった、何でも其時分、近所に孝行八百屋が居たので、華山の偽物を五六幅描いてやった。俺の名前では銭にならぬから、華山の落款で高く賣せて、銭は皆呉れてやツたが、いくら孝行を助ける爲でも、偽物を作へたのは悪かつた」と、草雲は後に懺悔した事があツた。

一五

「父様々々、母様が」と、格太郎の慌だしく呼ぶ聲が聞えた。「何、菊が何うした」と、草雲も驚いて、枕元へ飛んで来た。

二十餘年貧苦の裡に、日夜債鬼と闘つて、苦勞に苦勞を重ねた菊が、遂に其軀に迄及ぼして、憂悶の結果病を獲たのは、まだ山谷にゐた頃からで、褥に就てか

らも既に三年越に及んだ。

草雲は曩に、父翠雲の歿した嘉永六年の冬、再び舊主戸田大炊頭に召出されて、藩の書師を囑せられ、實家は義弟賢三が、五郎と改めて嗣でゐたから、別に一家を興して士分に列し、町に住んで御用は勤めてゐたけれど、僅か一萬千石の小藩、固より充分の扶持がある筈はない、其上草雲も健康を害して、久しく筆硯と遠ざかつたので、山谷時代の窮乏は、殆ど筆紙の盡す處でなかつた。家には一粒の米もなく、金もないのに蕎麥屋へ往つて、漸く腹を拵へて歸りに、妻子には饅頭を買つて来て、纔かに一時の飢を凌がせ、而も其勘定は、晦日に取りに來いと云つて、一時を逃れた事もあツた。或時は子供に握飯を一つ與へて、それを喰つてから、もつと呉れと云つた時に、最う一粒も残つてゐない事もあツた。

草雲の健康が稍復した頃には、菊の衰弱は益々加はり、遂に山谷の家にも住兼て、傳法院前の火の見横町に、膝を容る、ばかりの家を借りたのは、安政三年四

十二の厄年だつた。それからまた三年、菊の病は日に重く、後には健忘の症となつて、さしも賢女と云はれた婦人が、殆ど喪神のした様に、愕乎として煎餅蒲團の裡に、唯だ死期を待つばかりとなつた。

安政六年の暮も押詰つた十七日、最早餘命旦夕と見た草雲は、せめて未來を安らかに喫らせ度いと、自ら紙を舒べて彌陀來迎の圖を作つた。格太郎が慌だしく呼かけたのは、恰度それが描上つた處だつた。

「菊、菊、氣を確かに持て、これが解るか、む」「は、はい」と云つて、么微に眼を睜いた菊は、腫を据ゑて凝平畫像を瞰詰めてゐたが、囁語の様に、「筆を筆を」と呼んだ。「お、筆は、茲にある、格太郎持たせてやれ」。菊は力ない手に持添られながら、筆の運びも辿々しく、「追分の佛に後世を打まかせ」と書いた。「うむ、下の句は」と云つた時は、最うがつくりと落入つて、再び息も通はなかつた。享年四十二であつた。

涙の裡に草雲は、最期を其儘の死相を寫して位牌に代へ、葬ひの後も之を床に懸けて、日夕香華を怠らなかつた。

「免して呉れ、菊、長の年月苦勞ばかりさせて、遂に一日の安心も與へる事が能なかつたのは、皆俺が悪かつたからだ、其代りと云つても及ばぬ事だが、せめては罪亡しに、俺は一生獨身で通し、決して二度の女房は持たぬぞ」。

遺骸は今戸の稱福寺に葬り、「白寶院釋齋華」と法名を受け、衣皿什器を悉く典賣して得た三十金は、全部香華院に納めて、永代誦經の料に供し、自分は間もなく家を疊んで、心淋しい遊歴の途に上つた。

一六

「あばれ梅溪は、いつ迄も「あばれ梅溪」ではなかつた。

妻が長の患ひに、聊か氣の挫けた處へ、偶明人盛茂燁の山水畫を得て、其效法に心酔し、寢食を忘れて之を學ぶ事五十日、「茂燁も人間なら、俺も人間だ、稽

古して仁ない事はあるまい」と、正覺坊が酒を罷めて、潛心筆摸に没頭した結果、漸く手法を悟入すると同時に、心機も亦一轉した。

暇さへあれば遊びに出て、殆んど家にゐない雲草が、糟糠の妻の臨終に、せめても優しい言葉をかけ得たのは、全く此畫の爲でもあつた。

一子格太郎は、曾て思親だつた醫師小松原某に預けて、年の内に江戸を立つた草雲は、筆を載せて上毛に再遊し、妙義、榛名、赤城三山の幽趣を探つて、之に盛茂輝の鋳法を應川し、淹留半歳、山水の筆寫に一機軸を出して、翌年の夏再び江戸へ歸つた。而して新生涯に入るに方つて、「俺も今迄は梅溪の號で花鳥を售り、技は嫌はれなかつたけれど、素行が悪い爲人間が嫌はれた、固より名の罪ではないけれど、一度悪名を賣つてしまつては、又容易に雪ぐ事は能ぬ、新しく旗擧すると同時に、名も亦新しくしなければならぬ」と、乃ち梅溪の署名を罷めて、字の草雲を用ふる事とした。

「花は盛り月も隈なきあたら夜を、酔倒れたる人は誰かは」と詠んで、諸會へ出ても辭を卑うし、身を遜つて人に接するので、以前を知る者は皆其豹變に驚いた。

「何者、あばれ梅溪は最う死んで、新しい草雲が生れて來たのだ」と、素面でニコニコ笑つてゐた。

猩々曉齋が、眞赤になつて飛込んで來た。

「阿兄ゐるか」、「お、曉齋か、相變らず酔てゐるな」、「大きなお世話だ、今日は阿兄に言分があつて來たんだ」、「は、何か聞いて來たな、まア待て、今に之を描上てしまふから、其上で聞いてやる」。草雲は曉齋の憤つて來た所以を知つてゐた。それは或時人に向つて、「俺も随分今迄は天狗であつたが、山水の趣を解してから、初めて本統の畫といふものが解つた、曉齋も拙くはないが、惜むらくはまだ曉るまい」と云つた事がある。それを聞いたから堪らない、曉齋は齒切を

して口惜がり、「何だ阿兄々々と立て、やれば、好い氣になつてつけ上り、やツと茂燁の上ツ面を撫た位で、俺の畫を誹る杯とは無禮の至りだ。本統の畫が解ツたも凄まじい、何方が巧いか拙いか技競べをして、謝罪せせずに置くものか」と、大變な意氣込で、經營慘憺、一幅の山水畫を作り上げ、酒を被ツて草雲の門を叩いたのだツた。

一七

「うむ、恰度好い處だ、描上る處を見物する、遠慮なくやんなさるが可い」。曉齋は膝を乗出して、瞬きもしずに瞰詰めてゐた。

草雲は健腕を揮ツて、點綴縦横、描抹自在、倏忽にして一山、また一水、雲煙湧き、溪流咽んで、紙に聲があるかとばかり、輕妙の毫、奇拔の想、迎も梅溪時代の物でない。膝頭を掴んで唸りながら、一抹一線にも目を放たず、果は恍惚となつて、醒めた酒よりも畫に酔ツた曉齋は、思はず溜息を漏して、「阿兄、迎も敵

はぬ許して呉れ、「何うした」、「いや、阿兄が俺の畫を貶したと聞いて、腹立紛れに實は技競べに來たのだが、此出來榮を見てゐると、迎も俺達の及ぶ處ではない、初めて自分の拙い事が解ツた、心を入替て勉強する」。云ひながら、折角持つて來た自分の畫は、披きもせず寸々に引裂いた。

草雲の名は漸く知られたけれど、權貴に求めず、富豪に沾らず、獨り高く氣を負ふて、自ら鷄群の孤鶴に擬してゐた事は、相變らずなので、貧乏も亦相變らずであつた。

「富豪は禮儀を知らぬものだ、近づけば屹度不平の基だ、初めから近づかぬに限る」と云ツて、誓ツて富豪と大名との門へは、足踏をしなかつた。

版下の頼み手は、以前からも澤山あつたが、「俺は畫工ではないから、版下を描く事は能ない」と云ツて、斷るのを常とした。併し版行の書が氣に入ると、進んで描いた事もないではなかつた。越智守弘の「下野國誌」、大内餘庵の「東蝦夷夜

話」及び「海外新話」等は、世を益する書籍だからといふので、快く其挿話を描いた。又物質上の世話を受けた門人、中山嵩岳の懇請黙し難く、假に同人の名を署して、「生寫四十八鷹」、「薜花帖」等の板書を、刊行させた事もあるにはあつた。併し射利を目的とする書肆の需めに應じて、稗史小説の挿話を描く事だけは、絶對にしなかつた。

而して自ら清貧に安んじて、當時勢州津の藩主藤堂相泉守から、十五人扶持を以て召抱への話があつた時の如きも、「御懇のお言葉は忝けなうゝるが、既に先年我藩の重臣、川上重右衛門に向ひ、假令加賀仙臺の大藩より、千石二千石の高祿を以て、召抱への御沙汰があらうとも、誓つて二君に仕へ申さぬと、約つた言葉も△りますれば、今更小祿を棄て、高祿の御恩に預りまする事は、義として私の致し兼まする處、況して伊勢米は、粘力が強いと承はりますれば、若しも踏んで足跡に附きますると、以後の飛躍に不便を感じるで△りませう、何卒御前よ

しなにお断りを願ひ度い」と云つて、之に應じなかつた。

而して文久元年、四十七歳を限りに、江戸を去つて郷里足利に蟄伏した。

一八

安政の大地震以來、世上益々騒がしく、人心恟々として、筆資に衣食する者は、餘程世故に長じて、如才なく立廻る者の外は、其日の糊口もなり兼る時代になつたので、清廉自ら持する草雲の如きは、暫く地方に退いて、徐ろに再舉を計るより外に途がなかつた。

而も餓ゑても二君に仕へないとの答へを、使者の復命に依つて聞いた藤堂侯は、深く其義心に感じて、扶持の代りに書を需めて、それとなく援助した。草雲が足利隠退の餘資は、これに依つて作られたのだった。

併し足利へ歸つても、貧乏は相變らず附いて廻つた。郷里の人もまだ其書名を知らぬから、殆んど頼みに來る者はなく、門前は常に雀糞を張つた。南「書浴

衣」なるものを描いて、一時の好みに投じたのも其頃だった。それが流行って、足利から館林へかけ、祭の揃浴衣杯に、草雲の描た四君子や龍虎、富士や花鳥の、今に残ってるものが、まだ餘程あるといふ。無論幟も描た、燈籠も描た、踊屋臺の金襴迄描た。

其中に唯一人、一卷(二百枚)の唐紙に金十兩を添へて贈った知己があつた。親友山藤勘兵衛の息で、大島彦右衛門と云つた。草雲は喜んで、早速四百枚の半截を作り、悉く揮毫して彦右衛門に返した。一手ならしの揮毫、草紙代のお禮に進ぜる。而も四百枚の潤筆十兩とすれば、半截一枚驚勿二百五十文であつた。

秦隆古が遊歴して足利に來た。氣取屋征伐では、怨みを買つた草雲だけれど、時代も遷り、人も變つた。草雲の方から出蒐て往つて、久潤を叙して歸つたが、熟々と歎息して「俺も人物畫に於ては、隆古に一歩を譲るけれど、其他の物では決して劣らぬ積りだが、隆古の許へ往て見ると、注文の絹が山の様にある、俺の

許へは、紙本の外に頼みに來る者はない、運に違はねば仕方のないものだ」と、思はず愚痴を吐した。

隆古は人傳にそれを聞いて同情し、「全く、山水花鳥を描かせると、草雲の方が俺より上だ、俺も足利にゐる間は、人物の外は決して描くまい」と、山水花鳥の頼み手があると、草雲を推して其方へ廻した。郷里の人々が、初めて草雲の手腕を知つたのはそれからで、漸く絹本の頼み手がある様になつた。斯くと聞いて草雲も、「人には各長所がある、俺は山水花鳥を得意としてゐる、而して隆古が之を推奨して呉れたとすれば、俺も亦彼の長所を敬重しなければならぬ」と、隆古が滯帯してゐる間は、草雲も誓つて人物を描かなかつた。而して隆古が去つて後、其人物畫の長所を探り、自分も覺融僧正を學んで、更に一特色を加へた。

世上の風雲は益急に、いつ戦争が始まるかも知れぬ噂は、小藩の足利を迄動かして、草雲が青雲の宿志は、半白の歳に至つて又發し、筆を投じて劔に代ふる

の時が来た。

一九

小藩の足利には江戸詰の士卒六十人、在國の者三十人、雇兵を併せても百人には足りなかつた。

執政川上齋佐は、豫て草雲の材幹を認めてゐたから、舉て藩政に參與せしめんとしたが、名聞を好まぬ草雲は、更めて職に就く事を厭ひ、やはり畫師の資格を以て、藩邸の外に住ひ、覆面參政として貢獻する處が多かつた。

慶應の初年、天下の形勢愈急迫を告ぐるに及んで、足利の藩論も二つに別れ、江戸に在る者は佐幕に傾き、在國の者は勤王を唱へて、兩々譲らず、而も勢力は士卒の數と比例して、勤王黨は佐幕派の、半數にしか過ぎないので、少壯客氣の輩は脱藩して江戸に奔り、佐幕派の首領を斬つて義に殉せんと敦囑いた。草雲は齋佐を輔けて、固より勤王を鼓吹してゐたが、荒立て、は却つて不爲と、

強て抑へて發せしめなかつたので、脱藩の士十一人、白晝提灯を點て川上の邸に迫り、齋佐には詰腹を切らせ、草雲は斬つて軍神の血祭に上げやうと誓めいたが、草雲は少し驚かず、齋佐と共に従容として、名分を論じ、利害を説き、自ら十一人に代つて出府し、死を賭して藩論を定めると誓ひ、

命をば君に捧げぬ首をば、いかなる猛き者やとららむ

と詠じて、潑墨淋漓、其座の壁に大書して見せた。

血氣の若者も之に服して、髪を斷て罪を謝し、輕舉妄動を慎んで、吉左右を待つ事を約したので、草雲は十一人に訓へて、誠心組の一團を結ばしめ、即日立つて江戸に向つた。五十一歳の春、上巳の節句の當日だった。此歌は後に武田耕雲齋の詠とも、また官軍東征の砌、やむごとなき宮の御歌とも傳へられた。

江戸に出た草雲は、直に藩主忠行に謁して大儀を懇懇め、藩論忽ち勤王に決したので、直ぐ又足利に引返して、十一人を歸藩せしめ、誠心組の組織を改めて、

新に誠心隊と名け、自ら其隊長となつた。

誠心隊は町家の子弟で、國事を憂ふる者を募り、准藩士として士分の待遇を受け、苗字帯刀を許されて、自由に藩邸へ出入するの特典を與へられたから、風を望んで草雲の麾下に集る者、日ならずして二百の上に達した。而も武器は自辨とし、富裕な者は當時の新式元込銃を購ふに、一挺の價二十五兩、刀劍、軍裝之に適ふと、多きは二百兩も費したが、草雲の鼓舞が宜しきを得たので、皆喜んで自辨した。

同時に隊は、草雲を首領とする自治體で、藩からは出役の日に限り、兵糧として米一升を給せられるのみ、其米の出所も、草雲が請を描て藩に献上し、藩は金穀の上納者に、之を與へて納金を獎勵し、其一部を以て隊費を支辨する方略であつた。

足利の西北一里半、小俣に一揆が起つたといふので、草雲は直ちに隊士を率ゐて討伐に向つた。

誠心隊の軍裝は、筒ッぽ、だん袋の新式で、羽織の袴には白羅紗又は白木綿の覆輪を加へ、同じく白地に黒く雪輪を描いた肩章を附け、裏には「」が健筆を揮つて、雲龍、嘯虎、鬪龍杯を描き、それに「命をば」の歌を題して、士氣を鼓舞した、盛裝には金銀造りの軍刀を横へ、裏朱栗色に金紋打た反庇の陣笠に、白毛を長く垂れたもあり、各自新式の元込銃を肩にして進むので、二百の隊士は悉く百石二百石取の士兵と見え、足輕杯は一人もゐないから、堂々たる軍容は、戦はずして先づ敵を懼伏せしめるに足るものであつた。それが平生髀肉の歎に堪へなかつた處だから、多寡が烏合の土匪の如きは、鎧袖一觸にして忽ち四散した。

格から云へば士分とは云へ、僅に足輕程の扶持しか貰はぬ一介の講師が、優に四五萬石の諸侯でなければ、備へ得ない程の精銳を擁して、振旅足利に凱旋した

草雲は、其儘武裝を解きも敢ず、折柄愛宕山に爛漫の櫻花を賞で、一醉陶然として、八幡太郎勿來の關の風流を俾び、盃を上げて、

武具も解かて愛宕に來て見れば、風に打散る山櫻花

と詠んだが、全町の子女が人垣を作つて、此勇しい花見の宴を取巻たのに心づくといや、これは不可ぬ、何事ぞ花見る人の長刀、吾ながら飛んだ無風流であつたと、匆々盃を納めて下山した。

武人としての草雲が、得意の面目を示してゐる時、江戸に残した一子格太郎は夫婦で悲愴な相對死を遂げた。

格太郎は、生れて母に乳が乏しかつた爲、醫師の小松原へ里子に遣られ、稍長じて一旦父母の膝下に引取られたが、家計困難の爲十三の春、上野寛永寺内東漸寺の學童となり、數年の後再び家に歸つたけれど、間もなく母は歿り、父は足利へ退いたので、舊縁に依つて小松原の養子になつた。草雲の門人中山嵩岳の妹

も、やはり小松原の養女になつてゐるが、嵩岳は名目金を貸付けて、家が裕福なのに乘じ、養父母は娘の養育料を引出さうと、屢々請求したけれど、嵩岳が之に應じないとて、餘沫は娘の上に及び、箸の上下しにも目稜を立て、水仕同然に酷使ふので、格太郎が見兼ねて庇護ふ様になると、夫婦は又それを怒つて、兩人を共に虐待した、水の出端の若い同志、同じ境遇に同じ薄倖を泣き合ふ、同情は旋て戀となつて、いつしか割ない仲になつた。養父母は益々怒つて、尻を嵩岳に持込んだが跳つけられ、更に草雲の足利迄持つて來たけれど、同じく受付なかつたので、一家は忽ち渦卷の様な葛藤となり、男女は堪らず家を飛出した。

一一一

家を出た格太郎夫婦は、漸く父兄の助けを得て、養家小松原との關係を絶ち、中根岸に醫術の開業をしたが、若輩の上、僅か二三年見習つたばかりの漢法で、迎も一家を支へるだけの信用がないので、父の親友岸田吟香の口添で、寛永寺學

寮の句讀教師となり、毎月二分の報酬を得て、纔に鹽贈の補ひとしてゐた。——其内維新の遺言が熟して、天下騷然、寛永寺の學寮も、將に閉鎖せんとするに及び、頼りにしてゐた吟香は、師のへボンと一緒に上海へ渡航した。

勤王佐幕の争ひは、一家の中にも墻壁を作つて、草雲の勤王黨に對し、母の生家の松井氏、妻の兄の嵩岳は、孰れも幕府の恩を享けて、佐幕派に與したので、貧苦に憐む若夫婦は、これにも板挟みになつて、幼少から寺院に入と爲り、佛門の教育を受けた格太郎の厭世觀念は、益嵩じすにはゐなかつた。

偶々十五兩の金がなくては、身の立難い窮境に至つて、松井の伯父、中山の義兄にも頼んだけれど、何方も應じて呉れないので、已むなく足利の父を訪ねて、其窮狀を懇へたが、草雲も國事に奔走し、誠心隊の經營に忙殺されてゐた折柄、一家の私事を顧みる暇はないと、一言の下に斥けて、僅かに旅費を與へて江戸へ還されたので、格太郎は遂に進退谷まり、死を決して家に歸つた。

恰度足利から二人の客があつて、郷里に學校を興すに就き、塾長になつて呉れと云つて来たが、一旦決した志は、最早離す事が出来なかつた。幸ひの便に消息を頼むと、一書を認めて父の許へ托したのを、草雲が二人から受取つて、何心なく披いて見ると、それは普通の消息ではなくて、夫婦自殺の遺書であつた。「失策つた、俺の心を以て、若い者の心を付つたのが悪かつた、如何に氣が弱く生れついても、草雲の子が貧乏の爲に、豈夫死なうとは思はなかつた、飛んでもない事をして呉れた」と、直ぐに早駕で江戸へ出たが、着いて見ると格太郎夫婦は、既に絶れて二時間の後だつた。

窮苦の裡にも夫婦は、死装束を清うして相對し、先づ妻女が七首を以て心臓を貫き、突伏した上へ格太郎が、腹を切つて打重なり、更に咽喉を突いて絶息してゐた。床の間には母の菊子が臨終の砌、父母で合作した彌陀像を懸け、香を炷て來迎を念じた、燈ははだ室内に籠つてゐた。

草雲は格太郎の屍を引起して、「不覺者奴が、何故其妻らぬ命を以て、御奉公の爲に死なうとはせなんだのか」と聲を勵ましたが、嫁の耳元へ口を寄せると、「許して呉れ、俺は名の通りの木石であつた」と囁いた。檢視の役人も面を反けた。草雲は豫て俳諧の號を、木石道人と稱してゐた。

時に慶應三年五月二日、格太郎は二十五、嫁は二十二、草雲は自ら施主となつて、二つの屍を一棺に納め、香華院稱福寺に送つて、亡妻の側らに葬り、門人知己から贈られた香奠百六十兩は、悉く永代經料に納めた。

二二

戊辰の役、岩倉太夫具定を總督とする東山道先鋒軍は、信州下諏訪から二手に別れて、枝隊は甲州に近藤勇の勢を敗り、本隊は碓氷峠を踰て上州に入り、更に東進して野州に向つた。

足利の東南一里餘梁田の宿には、幕府の歩兵頭古谷作左衛門が、股走兵の一隊を率ゐて屯し、兩毛、信州の諸藩を語らうて、官軍に當らんと計畫してゐた。草雲の誠心隊は此時こそと、忽ち武者振ひをして起つた。初め武州羽生から勢を進めた作左衛門は、先づ足利の陣屋を襲つて、蓄積の金穀を奪ひ、以て陣容を整へやうと、變裝の斥候を放つて、足利に入らしめた處、町の内外到處の要所には、新式銃を携へた精銳が數十名宛屯して、其數少くとも二百以上、藩の陣屋にも別に數十の士卒がゐるので、斥候は驚き還つて報告をした。

「僅か一萬千石の小藩、士卒を併せても、やはか百人は超えまいと存じたに、參つて見ると思ひの外にも、武士姿の者ばかりで二百以上、あれに足輕を加へると少くとも五百以上になり申さう、兎も角も嚴重なる備へ、迂濶には進まれませぬぞ」と云つたので、作左衛門も左右なくば進み得ず、己むなく梁田に駐つたのだつた。

是より先足利の參政川上齋佐は、急を官軍に報ずる爲、中仙道に向つた處、何

かの行進ひから、其儘陣營に押留された、其報せが足利へ着いた時は、訛傳して川上が斬られたと播まったので、人心恟々、藩中は別の沸く如き騒ぎとなつた。草雲は之を制して、長州と縁故のある秋元氏に訊けば、川上の安否も判らうからと、且は足利の二心なき事を辨する爲、單騎馬を飛ばして館林へ向つた。梁田、木戸も過ぎ、今一鞭で館林に入らうとする、高根迄来た時、運悪く、幕軍先手の一隊と行合ひ、忽ち銃劔を擬して包围された。「何者だ、何處へ行く」、「足利の密使で、羽生へ参る者でゐる」、「何用あつて羽生へ参るか」、「歩兵隊長古谷殿に御面會申し、西國の軍勢を禮幣使街道に喰止る爲の使でゐる」、「左様か」と云つて圍を解いた、草雲は其隙を覘つて、一鞭呉れると驀然に、疾風の如く馳抜けたので、驚き怒つた幕軍は、ソレッとばかり銃口揃へて、釣瓶打に脊後から亂射した。雨と飛び来る一丸は鞍に、一丸は刀の鞘に中つたが、身には幸に微傷も負はず迂回して無事に館林へ着いた。

秋元氏の藩中には、講を草雲に學んで、師弟の關係のある者が十餘人もゐた。足利からも急を聞いて門人が迎へに來た。使命を果して翌日足利に歸つた草雲は直ちに藩の倉を開放して、金穀軍資を官軍に供した。幕軍の本隊が梁田に着いたのは、其夕方であつた。

二三

三月九日曉の一戦に、幕軍は脆くも敗北して、作左衛門は會津へ走つた。官軍鎮撫使の一行を迎へた足利では、藩の執政以下出迎へて、宛ら降人の敵將を拜する様な態度を見せたが、唯り草雲は敢て下らず、昂然として之に應酬し、交驩の宴を釜屋に開かれた時も、相對して交友の如く、談笑嬉しも屈色を見せなかつた。席に在る者は皆目を瞪つて、「草雲の偉い事を初めて知つた」と驚歎した。維新の大業が定まつて、一たび海内が靜平に歸すると、草雲は其誠心隊を擧げて藩に歸せしめ、自ら司令の任を辭して、再び丹青に専念し、沙周、徐燾を宗と

して、南北合法を大成し、又華山、霧崖、竹田、蕪村等の長所を探つて藥籠に收め、別に一家の風格を興したが、而も世は大變革の後を承けて、物質文明の輸入に忙しく、美術の如きは殆んど顧みる者もなかつたので、草雲の世に出る日は容易に來ず、耳順を超えて尙研鑽を怠らぬ傍ら、夜學を開いて經書を講じたり採してゐた。

草雲が足利に退いて十六年、江戸が東京になつてからも九年、當年の「あばれ梅溪」とも、生返つた草雲とも、最早口にする者もなくなつた頃、淺草井生村樓の雅會に、當時名流數十名參會した砌、無落款の駿馬を持參した者があつた。遑勁の筆、淋漓の墨、氣韻四筵を壓するの概があるが、誰あつて筆者を知る者がない。評語區々の處へ、猩々曉齋が現はれた。「は、は、は、つまらぬ議論は止しなさい、今の世にこれだけの畫を描き得る者が幾人あるか、俺でなければ足利の草雲さ」と云つた。裏を檢めると、果して草雲の眞署があつた。相距る二十二里、別

れて十六年、風の便りに唯其健在を知り合ふのみであつたのが、斯くと聞いて草雲も、「俺の描いた千里の駒が、曉齋の伯樂に會つて、素性を知られやうとは思はなかつたよ」と笑つた。

曉齋は岸田吟香と共に、草雲の東京に出て來る事を勧めたが、「いや東京には、曉齋さへるれば心強い、今更俺が出るにも及ぶまいよ」と云つて、遂に一生を足利で送つた。

知人の家を轉々して、幾度も居を替へた草雲が、漸く蓮岱山の一角に茅廬を結んで、白石山房と名け、初めて自分の家に住ぶ様になつたのは、明治十一年、六十四歳の春だつた。

蓮岱山は足利の名勝、白石山房は其西南に當つて、池に臨み淵を控へ、座して武相の連峰を望むと、遙かに海東第一の名山、富士に對する事が能る。草雲の富士か、富士の草雲か、寫山樓と號した文晁以來の名手と讃へられ、文晁未發の秘

を聞いて、或は以上と迄寫眞に名を得たのも、皆此山房の賜であつた。

二四

明治十年、第一回内國勸業博覽會に出品した、朝暮四季の富士六態は、夙く外人の認むる處となつて、朝暮の二圖は英國公使館に、四季の四態は清國公使に買約されたが、美術を解せぬ時の當路に、陶器織物の工藝品と、同列に扱はれたのを憤慨して、五年後の春第一回繪畫共進會の時には、出品の勸誘を肯んじなかつたが、佐野常民の調停に依つて、「春山曉靄」、「秋山晚暉」の二圖を出し、紅綬銀印の賞を得た。中にも紫の筑波を描た「春山曉靄」の疎畫は、特に草雲苦心の作で、米國の審美學者フエノロサの激賞する處となつた。

越えて十七年の第二回には、「棹搖山」、「十指春風」十九年の第三回には、「宣和帝意」、「寒村雪暮」の二圖宛を出品して、孰れも名譽の銀印を得、「足利の草雲」の名は、遽かに斯界を風靡したが、而も晩年には禪に參して、三昧に入なければ

硯に向はぬので、何時迄経ても貧乏は、相變らずであつた。

節季になつて懸乞に、一々辯疏をするのが面倒と、筆を執つて「草雲老人降參の圖」と題し、ベツたり門に貼付て置た。「おや」と云つて、足を停めた一人の懸乞があつた。何やら心に點頭きながら腰の矢立を取出したと思ふと、通帳に一本棒を引いて、いきなり畫室へ投込んだ。洒落者がゐる哩と、草雲も笑ひながら覗いて見ると、肝腎の畫がなくなつてゐるので、「待て、おい」、「へ、へ、へ、何かまだ御用で」、「いや、帳面を棒引にしたのは可い、無斷で俺を連れて行くとは何うしたものだ」、「へ、へ、へ、は、は、は、まア可い、虜には精々馳走をして、酒でもうんと飲ましてやれ」恚罵話は珍しくなかつた。

七十の老人が、刀を抜て賊を追拂つた事もあつた。其時の句に、「白浪のかへして寒し冬の月」それから直ぐに酒を温めて、悠々其圖を寫した後、「薪採る道も開けし御代なれば、山の庵に寄する白浪」と題した。

居留守を使ふ事の嫌ひだつに草雲は、俗客の長座に堪兼て、山房に四首の戒歌を貼出した。

只人の噂はするな唐倭、聖の事は御勝手次第、

する事は澤山あれど先はなし、無用に時をうつされな人

草雲の嫌ひどろぼうしわんぼう、大べらぼうに野暮に女房

草雲の好は貧乏朝寝坊、萬事大法たぼにつんぼう

それでも客の絶間がなく、無遠慮に畫室を衝く者があるので、眉を擧めて、「山

猿の來ては濁すや苦清水」と吟んだが、尙效目のないに及んで、暴に易へるには、

暴を以てする外はないと、遂に俗客退治の壁書をした。

- 一、三十分より長座無用
- 一、人の噂
- 一、政事ケ間敷事
- 一、庭内花木無
- 心の事
- 一、揮毫の催促
- 一、新に畫を頼む事
- 一、新聞口調を用ふる若輩者

人時人名

以上更々お断りく

蓮岱寺 開山老和尚識

揮毫の謝絶策に窮して「俺も近頃は慾張になつた、一寸一圓でなければ描かぬ」と、これなら頼み手はあるまいと思つたのが、見事に失敗して、それなら寧ろ廉過ると益揮毫攻に遭つたのは明治十五六年の事だつた。

二五

明治十二年、皇居御造營の砌、御杉戸の揮毫を命ぜられ、萬葉、古今の歌意に據つて、四季の花鳥四圖八枚を描いて歡感に浴し、金品を賞賜せられたのは、草雲一世の光榮であつたが、時の御歌所長高崎正風男、其「月夜秋草」の圖を觀て、小首を傾けた。

「はて芙蓉といふものは、且に開いて夕に閉づる花ぢや、斯圖に閉ぢて居らぬのは怪訝い」と難じたと聞いて、草雲は思はず歎聲を發した。「歌人は坐ながらにし

て名所を知るとは聞いたが、丹青の道は談せぬと見える、芙蓉が朝咲いて晩に萎む位、荷も花鳥を描く以上知らぬ者はあるまい、俺も少しは本草を學んで、芙蓉の花が一日に、三變する事を知つてゐる、あれは其三變の半分附ちた處を描いたのだ、月夜の芙蓉を全て萎ませて描く扱は、圓山應舉なら或は知らぬが、此草雲には能ぬ事だ」と云つた。

草雲がまだ江戸にゐた頃、花鳥を以て一世に鳴つた者に、華山の高弟椿椿山があつた。當時の畫壇に花鳥といふ者は、椿山でなければ講でないと迄稱せられたので、草雲も一日其門を叩いて、教へを請はふとした事があつたが、椿山の草雲に對する甚だ冷淡で、歸りに生憎雨が降出した爲、雨具を借りやうとすると、一枚の蘆を門人に出させた。草雲は其無禮を憤つて、死でも椿山は學ばぬと誓ひ、獨りで研究するに當つて、椿山も巧いには違ひないけれど、仔細に檢ると圖に牽強がある、畢竟本草を究めないからだ、親友栗田萬次郎に就て斯學を修め、專

ら眞を寫す事に努めた。

草雲の辯妄を人傳に聞た正風は、早速實物に就て檢べて見ると、果して其言葉の通りだったので、「嗚呼歌人は畫家の心を知らなんだ」と、人を以て詫にやり、爾來また草雲の畫を評さなかつた。

廿二年には、巴里の萬國博覽會に名譽賞牌を受け、翌年初めて帝室技藝員を置かれた時、老病を以て固辭したに拘はらず、寵命に依つて之を拜し、「老朽て羽節も弱き山鶴、雲井はるかに翔る今日かな」と詠んだ。二十四年第一回美術展覽會に、白石山房から見た富嶽圖を出品して、銀牌を得たが、第二回の時は、人を以て金牌の豫約をされたので、審査の情弊を不快として出品しなかつた。越て二十六年北米市俄古の大博覽會に、宮内省の命を奉じて、富嶽晴色の圖を出品し、名譽大賞牌を受けたが、送還の途中、海氣の爲圖に侵蝕が出来たので、「草雲の畫も最うお終ひだ」と云たのが讒をなし、宿痾、癩麻質斯漸く重く、遂に三十一年九

名人崎人終

月一日、八十四歳を以て白石山房に歿した。夙に養子相續の弊を唱へて、持論を實行した草雲の遺財は、遺言に依り擧て知己に譲られたが、山房の遺蹟は記念として其儘存し、書籍と遺愛の琴とは、足利學校遺蹟圖書館に寄附された。

小室翠雲は、草雲晩年の弟子であつたが、翠雲の號を與へるに臨み、「これは先人の號であるが、惜い哉先人は名を成さずして逝かれた、汝代つて先人の爲に、翠雲の名を揚る様に努めよ」と云つた。翠雲の號の由來はこれであつた。(此項終)

不許複製



大正八年五月一日印刷
大正八年五月三日發行
名人崎人
定價壹圓

著者 本山 荻舟
發行者 長谷川 巳之吉

發行所 東京市芝公園
振替東京一四一七七
玄文社

渡邊虹衣 中井浩水共著

骨董書 掘出物語

定價壹圓五拾錢
送料 八 錢

最近骨董界好事界に於ける掘出の興味
ある珍談及名家巨匠の逸話をあつめた
ものであります

388
18

終

